

---

# 奴隸少女は規格外

猫師匠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奴隸少女は規格外

### 【NZコード】

N7822W

### 【作者名】

猫師匠

### 【あらすじ】

コンビニに行つた帰り道、何故か異世界に来てしまつた主人公が美少女を助けて冒険の始まりだ！ なんてことは無く、美少女と共に捕らえられてしまう主人公。奴隸の刻印で逃げる事もできず、かといって契約主をころ……もとい、ぶつ飛ばす事も出来ないのでそのまま売られ売られて行くお話。主人公ちょっととずつ最強系。第一部「完」第二部へ入る予定。

## 宛ての無い手紙

拝啓、お父様、お母様。

私、奴隸になりました！

いやいやいや……

どんな書き始め方だよ。

意味分かんないし、心配しないでくださいとか言つても説得力皆無どころか私の株価も急下降する勢いだよ！

話すと長いんですが、現在私は地球に居ません。

異世界？ つて所だと思います。

火星とか月に居る訳じゃないよ？ 間違つても私の頭がおかしくなつた訳でも無いよ！

『ウールヴェス大陸』

これが現在、私が居ると思われる場所です。

大陸の東の端っこ、『セントリア貿易都市』

此処に住んでいる貴族の方に雇われました。

地図はありません。

私の美術評価が1だつた事を知つてゐる両親なら分かつてくれる事でしょう。

職場は割と快適です。

三食<sup>サボリ</sup>寝がついて毎月の給料も少しですが頂いています。

仕事は掃除洗濯炊事と幅広く、旦那様の翻訳係なんでものもさせ  
て頂いてます。

生き残る事と、人生を楽しむ事については一塙言があるので、問題  
ないと判断することでしょう。

しばらくはせひりに帰れる事は無いこと彌つので、ひりひりの世界で  
気ままに生きて行こうと思ひます。

追伸

旦那様と言つのは雇い主の事ですので、あしからず。

## 宛ての無い手紙（後書き）

感想とかダメだしとか待っています。

# ポテチは何処、私のコーラは？

此処は何処、私は誰？

うん、一度は言つてみたかつた。反省も後悔もしていない。

た  
だ  
し

言はせて下をこ。

よく思い出せ、私。

名前は?  
村雨沙耶だ。

## 性別、女性。

年齢、1……まだ17だ！

黒髪、腰まで届くロング、ツリ眼、ツルペタ、童顔。

大丈夫、私だ。

記憶を辿つてみよつ。

家を出たな、茶色い木製に見えて木製じゃない家のドアを開けて。

コンビニまで歩いた筈だ、徒歩2分もかからない距離だ。

買い物したな、ポテチとコーラ。

帰り道、光が見えた、此処に居た。

大丈夫、意味分かんねえ……

周囲を確認。

木 木 木 木木木 木木木 木木木 木木

結論、森。

道も無い、未知しかない。

周囲は暗くなり始める直前、と言つたところ、歩くのは危険過ぎると判断し、適当な木に登る。

地べたで寝るなんて危なすぎる。

もし森の熊さんに出会つたら忘れ物は自分に命になつてしまつ。

お、意外と快適かも…………背中痛い。

とりあえず朝まで待とつ

辺りが騒がしくて眼が覚める。

「朝つぱらから何騒いでんだ！」

つて、此処は何処だ。

寝起きで頭が回らない。

ああ、昨日もやつたな此処は何処ネタ。

いやいや、そんな場合ぢゃないし。

「追え！ そつちに逃げたぞ！」「はつはー、讓ちゃん讓ちゃん、  
逃げ場はないぜー」「傷は付けるなよー 大事な商品だからなー！」

何やら物騒な声が……

下を見れば16歳くらいの金髪美少女。

面倒事に巻き込まれた予感。

「何してんの?」

とりあえず声を掛けてみる。

「奴隸商人達から逃げてるんです!」

「へえ~」

あら、声まで可愛い。

「…………つー?」

違和感に気がついたのか美少女がこちらを見上げる。

「やほ~」

美少女の顔が強張る。

可愛い子に恐がられるのは少し傷付くが、不審人物である自覚はあるので仕方無い。

「助けてあげようか?」

これでも武門の家柄で、そこのチンピラに負ける事は無いといふ自覚がある。

「.....」

あからさまに警戒する美少女.....って名前聞いてないや。

「私は村雨沙耶」

「.....アイリス」

アイリス、アイリスね。

覚えた。

周囲の気配を読んで、相手の人数は5人程かな? とあたりを付

ける。

ま、何とかなるでしょ。

愉しくなつてきちやつた

私は木から飛び降りると、そのまま近くの敵へと走り寄る。

男、身なりは山賊の様にも見えるみすぼらしさ。

もちろん背後から走り寄る。

正々堂々? 何それ美味しいの?

首筋に手刀、一撃で意識を刈り取る。

後、4人。

また近くの男へと背後から近寄つて首筋に手刀。

「変な奴が居るぞ! 気を付ける!..」

運悪く発見されたらしい。

後3人、流石にキツイか?

辺りを警戒していた敵の背後に回り込んで背中を蹴り飛ばす。

倒れこんだ男に対し、踵を首へ振り下ろす。

グキッ、と言ひ音と共に沈黙。

後2人。

「周囲を警戒しながら馬車に戻れ！ 体勢を立て直すぞ！…」

逃がすと思つてんのかね？

馬車へと向かつて走つてゐるのであらう男を発見。

側面へと回り込んで木の影から足を引っかける。

派手に転倒、首筋に踵を振り下ろす。

後1人か。

「畜生！ 何処のどいつだ！？ こんな辺境の森に誰が居るつてんだよ！…？」

馬車の近くで喚いている男の背後から忍び寄り、手を掴んで捻る。

そのまま足を掛けて上に乗る様に膝で背中を抑え込む。

「ねえ」

「ひつ……お、俺は何も知らねえー。」

いきなりそんなこと言われても……

困ったな、愉しくなつてきちゃつた。

「何であんなかわい」ちゃんを追つかけてたのかなあ？ お姉さんに教えてくれる？

「お、俺達は雇われただけだ。本当だ！ あの娘を王都まで連れて来いと」

「おうと？ 嘔吐？ 王都か、地球にそんな国あつたかな？」

情報収集の為に今居る場所など、根掘り葉掘り聞き出していく。

説明が面倒なので簡潔にまとめる。

「ウールヴェス大陸、現在私が居る大まかな地名。

南のマイゼル山脈の麓に広がる森、現在私が居る細かい地名。

結論、日本じゃない。

最低でも私はその名前に聞き覚えはない。

他にも、あっちの方の村からアイリスを連れて行くためにあーだこーだと長ったらしく説明があるのだが、面倒。

そろそろネタ切れらしい最後に残つた男の首に、手刀を叩きこんで黙らせる。

「終わった終わった

立ち上がり、アイリスを迎えて行こうとしたところで、『狩り取れ、闇』と言つ声。

え、何その中二

意識が途切れた。

## 何その設定

迂闊だった。

5人しかいないと思い込んでいた。

感が鈍つたかな？ 最近鍛錬とかしてなかつたからなあ……

現在馬車の中。移送……もとい、移動中。

奴隸商人らしい男たちは、人数が減つて3人。

私の隣には金髪美少女こと、アイリスがちょこんと座つている。

身長は160くらい、結構な美人さん、長いふわふわの金髪最高！

「あの、わたしの所為で……」

ああ、アイリスは悪くないの！ だからそんな悲しい顔は見せないで！

「大丈夫、お姉さん強いから、何時でも逃げ出せるわー！」

「逃げ出せりつと思つていろなら止めておけ」

馬車を運転していた男から声が掛かる。

全身を包む黒いローブ。ハツキリ言つて趣味が悪い。

「どうこつ意味よ」

「左手に奴隸の刻印を押させもらつた。逃げだせば命は無いぞ。もちろん、歯向かつてもな」

何それと左手を確認して見れば、何やら黒い刺青の様なモノが。

乙女のやわ肌に何してくれとんじゃーー

「その刻印は契約主、今は俺になつてゐるが、その契約主から一定距離を離れると激しい苦痛を与えるように設定してある。そして契約主が命を落とせば刻印を持つてゐるお前も死ぬ」

何その設定……

「悪いとも思つて無いが、お前にはアイリスの人質になつて貰おう」

だから、何、その設定。

設定じゃなかつた……

何あの苦痛。

男共が川で水浴び……まで、これは誰得だよ。

まあいい、その隙に田を盗んで逃げようと思つたんだけど、たぶん300メートルくらい離れた所で圧迫される様な不快感が私を襲つた。

これぐらいなら大丈夫と判断した私は、そこからさらに100メートルほど歩いて行動不能になつた。

全方位から圧迫される様な頭痛。

脳ミソをかき回される様な不快感。

体内をグチャグチャにされる様な痛み。

苦痛はロープに回収されてからもう30分ほど続き、私はその田一日を硬い馬車の床で過ごす事になつた。

その前もその後も硬い馬車の床で過ごしてるのでね。

確かにこれは逃げられない。

## 何その設定（後書き）

感想とか指摘待つてます

逃げるのも「うろこ」。傷つけるのもダメらしいので、大人しく連れて行かれることにする。

長いモノには巻かれる。これ大事。

「でね、その子が」

「そんな事あるんですか！？」

ええ、大人しくしますよ。

「やつぱり男ってダメよね！」

「そんな事ありませんよ。フインはちょっと頼りない所ありますけど」

「なになに、彼氏？ アイリスちゃん可愛い～」

「や、彼氏とかでは無く

顔が真っ赤に染まるアイリスちゃん。マジで可愛い、食べちゃいたい。

「大人しくしてろ！」

怒られた……

十分大人しくしてるんだけどなあ、姦しいだけで。

「もうすぐ王都だ、静かにしている」

捕まつてから1週間（たぶん）がたつた。

その間に随分とアイリスちゃんとは仲良くなれたと思つ。

移動距離的には長かったのか短かったのかはよく分からん。

山道とか森とか結構曲がつたりうねうねしたり、たぶん自動車で移動すれば1日走ればいい位の距離だと予想。

馬車の窓から顔を出して外を見る。

いつの間にか森を抜け、草原の道を走っていたので、その姿は一目で確認できた。

でかい……城？

「うわ～ ホントに日本…… つてか地球でも無いぽいなあ～」

城の周りに大地が浮いて存在していく、そこにも城やら家やらが確認できる。

物理法則完全無視。

そして私のボキヤブラリーの少なさに絶望した。

城とか家とか馬鹿か私は、もつとこりへ、なんて言つのかな  
パルノン神殿の様な莊厳さとか、いや、パルテノン神殿なんて見  
た事も無いけど。

比喩表現さえ出てこねえ……

最低でも和風の城じゃなく、西洋風の城だとは言つておく。

「ねえ！ どれが王都？」

数えきれないほど浮き島（？）が有り、城も見えるだけで5つ  
はある。

「アレ全てが王都だ。一番上に在るのが王城、その下に1級貴族たち、次いで2級貴族、3級貴族、学園区画と在り、地上には平民や商人、兵や騎士、文官も下だつたかも知れん。まあ、幅広く住んでる筈だ」

なるほど、文字通りの城下町つて感じだね。

アイリスから聞いた話とかをまとめるところになる。

上に昇るに従つて偉い人が住んでる。

人がいっぱい。

神子様とか住んでるらしい。

聖女とかいるらしい。

アイリスちゃんの胸は大きい。

今年で16歳。

私ヨリ2つ……いえ、1つ下でこのマジコマロメロンとは  
侮れん。

王都の説明じゃない？

どーせ、私には縁の無い所ですから。

アイリスちゃんを依頼主に 黒いローブの人も雇われただけ  
らしい 届けてから、私はどつかに売られるらしい。

まあ、奴隸制度も想像していたよりも酷くは無いらしい、馬車馬  
よりは良い生活が出来るらしい。

『ごめんよ馬車馬さん。私は幸せになるからね。

物理法則完全無視（後書き）

感想 訂正 矛盾 指摘 待つてます

雪国に行きたいか！？

山賊風の男たちとは別れ、王都に入る。

王都の中は中世のヨーロッパ風。

本物は見た事ないけどね。たぶんそんな感じ。

露店があつて、店があつて、人がいて。

どこもかしこも賑わっている。

「いつもこんな感じなの？」

「祭りが近いからだろう。いつもはもう少し穏やかな街だ。お前はその祭りで売る予定だからな」

私の質問にローブが応える。

最後の一言はいらなかつたよ。

周りを見渡せば身なりの良い人から魔術師っぽい人、騎士っぽい人、商人や平民入り乱れて、どの人を見ても笑顔。

うん、いい街だ。

そこで違和感。

看板を見る。

商品の説明書きモノを見る。

読める…………と云いつ意味は分かるけど、日本語じゃない？

今まで当たり前の様に日本語で喋つてたけど。あれ？

「ねえ、アイリスちゃん、アレなんだと思つ？」

「ゼシの肉を串焼きにしたものだと思します。美味しいですよ」

適当に指をあしめてアイリスちゃんの口に注目。

やつぱつ、日本語じゃない。

聞こえてくる、いや、私が認識しているのは日本語だが、口の動きは全く違つたものだった。

「あー、あー。本日は晴天、本日は晴天」

「どうかしたんですか？」

「いいえ、何でも無いわ」

自分が発してこる声や、口の動きに注意して気がついた。

私も日本語喋つてないし……

なんだらう。これ？

たぶんこの世界、と云つよつ、アイリスちゃん達の共通言語を喋つているんだらうナーバ。

便利な脳内変換とでも思つておけばいいのかな。

言葉は通じ無いより通じた方が便利なのは確かだしね。

「ここからは徒歩だ。降つる」

馬車から降るされ街の中心に在ると思われる大きな城へと入つて行く。

馬車はどうするんだらうと思つていたり、門の近くの兵士達が持つて行つてしまつた。

ロープもアイリスちゃんも気にして無い様だし、まあいいか。

とぼとぼ後ろを付いて行く私とアイリスちゃん。

城の中つて独特な雰囲気があるよね。

場違い感、半端ないっす。

大きな扉の前で立ち止まるロープ。

「入れ」

入つてみれば広間みたいなんだけど、何も無い。窓も無い。

照明に照らされた、ただ広い空間が広がっているだけ。

「中心まで歩け」

言われた通り真ん中に進み出る。

何か意味あんの、これ？

そう思っていたら、床が光り始めた。

何も無いと思っていた部屋の床には、巨大な魔法陣だと思われるモノが書かれていて、それが青白く光っているらしい。

大き過ぎて何が書いてあるのか把握できない。

それと私に詳細な説明は無理、美術1は伊達では無いのだ。

教師には「1でも戻え過ぎだと思ってる」とか言われた事あるし……

そこまで酷くないよ！

何か操作していたロープも私達がいる真ん中へとやつてくる。

「気分が悪くなるかもしけんが、一瞬だけだ、我慢しや」

ロープの言葉と共に軽い浮遊感。

酷いエレベーターよりはまし、といつ程度なので、そこまで気分が悪くなるような事も無い。

しかし、アイリスちゃんは違った様で、ちょっと顔色が悪くなっている様な気がする。

30秒ほどで、浮遊感が収まった。

「出るぞ、付いて来い」

え？ 何が変わったのか全く分からんんですね。

ドアを開けてびっくり。

そこは雪国でした。

## チキンな私を許せ

すいません嘘付きました。

でも内装が変わってる。

さつきまで質素な城の中だったのが、今度はもっと豪華、莊厳つて言ひのかな？

なんか偉い人が住んでるような…………ってまさか。

手近な窓に駆け寄る。

さつきは窓も無かつたのに、じゃなくて！

たつけー…………

見て見て、ほら。

あんな所に雲があるよ~。

遠い目をする私の眼下に、白い雲が広がっていた。

あ、鳥が飛んでる~、やつほー。

……………つ！？

思わず現実逃避していたらしい。

たぶん今居るのは、下から見上げた時に見えた一番上の城。

何処のラ ュタだよ。

…… ルスって叫んでも大丈夫かな？

落ちたりしないかな？

「バルシ」(ボソ)

チキンな私を許せ。

「何をやつている、いつちだ、早く来い」

またトボトボとロープの後を付いて行く私とアイリスちゃん。

城の中つて独特な（以下略

場違い感、5割増しで半端ないつす。

右へ曲がり左へ曲がり。

うん、逸れたら私迷子確定。

は れメタルよりもデロデロになつて発見される自信あり。

大きな扉の前でロープが立ち止まる。

如何にも偉い人 がいますつて言つ感じの扉。

豪華、煌びやか、本格サスペンス……は意味わからんねえな。

ロープは徐に、つてか乱雑にドアを押しあける。

それでいいのか、ロープ。

ドアを開けると…………つて此処マジで王様とか居そつなんで

すけど。

赤い絨毯、奥には金色の椅子、着飾った小太りのオッサン、周りには騎士が6人。

あ、ごめん、王様っぽい人の事、太ったオッサンとか表現したかも、今の無しだ願い。

「連れて来たぞクソオヤジ」

え？

おやじ、オヤジ、親父？

父？？ え？ この偉そうな奴が？ ローブの、父？

きっと何かの聞き間違いさ、だつて此処は一番上にある城、一番偉い人が住んでるはずなんだから！

「実の父に対して、それ以前に国王に対する言動では無いぞ。まったく、親の顔が見てみたいモノじゃ」

実の父、だと…？

「俺もお前の顔をお前自身に見せてやれたらと何度も思つた事か」

「おおー、お前は良く父親にだと言われてゐるからな、お前の顔を見れば自分の顔も想像できる訳じやな」

「へー……虫唾が走るー。」

なんか普通に憎まれ口叩き合ひつてますねビ。

アイリスちゃん、ドン引きを通り越して、後ろの扉を開けて今にも逃げ出しそうな感じ。

そして私も逃げ出したい。

「のジジイって本当に王様なのー!?

その王様に対しても此処まで碎けた口調で喋れるこのローブって何者?

「お前の所為でお嬢さんたちが退屈しておるだらう

王様が此方を向く。

正確には、アイリスちゃんの方を。

「ぐつ……納得は出来んが、その通りだな、話を進めよう」

私、帰っちゃダメですか？

## チキンな私を許せ（後書き）

内容の切り方 やつてみたかっただけ  
反省も後悔もしていない

感想とかいろいろ待っています

「ラグ立ちました？」

「先ずはこの度の非礼、許して欲しい」

言葉と共に王様が頭を下げる。

えーっと、私にどういって？

「頭を上げてください」

アイリスちゃんナイス！

「いや、私の我がままだ」

「困つてんだろクソオヤジ、事情を知らないんだから説明してから  
謝れ」

「いやしかし…………そうだな、その後で私の事が許せないのであれ  
ばいくらでも罵つてくれて構わない」

王様の長い長い説明が始まった。

長すぎるのでもとめよう。

偉い人の話は長くてダメだね、もっと簡潔に、短くするべきだと  
私は常々

閑話休題。

アイリスちゃんは王様の隠し子らしい。

王様もつすぐ死ぬらしい。

アンチ現王派がアイリスちゃんを利用しようと考えていて。

それを未然に防ぐために呼び戻したとか何とか。

どっちにしろ面倒事なのは変わらないが、王に守られている方が安全だと判断して、盗賊に見せかけた兵士とロープが向かったのとか。

テンプレですね、わかります。

あれ？ 私のした事って大きなお節介でした？

兵士の人たちも結構ノリノリでしたよね。

待てよ……これはアイリスちゃん護衛フラグが立ったんじゃない？

「」のまま私も学園入学とか有るんじゃね？

まあ、無いよね。

説明を聞いたアイリスちゃんは俯いて何かを考えている様だ。

「王位継承権については気にするな、別の人間が継ぐ予定だ」

その様子を見てローブがフォローを入れる。

フォローにもなつてない気がするのは私だけでは無いはずだ。

「私は、これから何をすればいいんでしょう」

決意したのか、アイリスちゃんは王をまっすぐ見つめて言葉を発する。

「特に何をする必要はないのじゃが、王立魔術学園に入学してもらう事になるだろ？」

「学園には最低でも3年、このクソオヤジが死ぬまでは入っていて

王の言葉をロープがフォロー。

そして、また長々と説明が入る。

要点だけまとめる

え？　まとめる必要ない？　そのまま流せ？

私のやる事が無くなるじゃないか！　暇なんだよ、ぶっちゃけ。

学園は一種の中立地帯。

入っていれば利用される事も無く。

王が利用する事も出来ない。

私、帰つていいですか。

疎外感、半端ないっす。

話が分からぬだけならいいんだよ。

この世界が分からぬ私にどうしようと……

## フラグ立ちました？（後書き）

感想　ダメだし　誤字脱字  
指摘とか待つてます

私が考へても変態です

その後1時間くらいで解放された私は、また転送部屋へと來ていた。

そこにアイリスの姿は無く、私とローブだけが魔法陣の上に居る。

「ねえ、アンタって実は偉い人？」

「何だ急に……」

「いやいや、王様っぽいジジイと親子だつて言つ話じやん？」

「王をジジイ呼ばわりとは……お前に常識と言つモノは無いのか？」

ああ、やっぱりあの人は王様だったんだ。

つて事は「イツ王子様？」

別の奴が王を継ぐとか言つてたけど、まさかね。

まあ、もう会つ事も無いし、王様の事はジジイと呼ばうがクソジ  
ジイと呼ばうが関係ないしね。

「で、アンタって偉い人？ つてか名前も聞いて無かつたね。私は  
村雨沙耶」

「ムラサメサヤ？ 珍しい名前だな」

「あ、こちち風に名乗るなら、サヤ＝ムラサメかな？ 沙耶が個人  
名で、村雨が家族の名前って感じ？」

「この国の人間ではないのか？」といつ質問に、「たぶんこの世界  
の人でもないっぽいんだよね～」とか答えられるはずも無く、無難  
に「そうだよ～」と答えておく。

その後は何事も無く田舎の階（？）に付いたらしく、ロープが部  
屋を出て行くのに付いて行く。

そろそろそのロープを取つたらどうだ、私は素顔すら見た事が無  
い。

つか私名乗つたのにロープ結局名乗らんかったし……

部屋を出るとまた違つた場所らしく、窓の外を見れば上には今まで居た城が見えた。

結構高さもあるらしい、下には幾つもの浮き島がある。

どうして偉い人は高い所に住みたがるんだろうか。

見降ろしながら「見ろ！ 人が の様だ！！」とかやつてゐる  
んだろうか？

それともバカなの？ 煙と一緒に高い所に登りたいの？

魔法陣がある建物を出て、そこからちょっと行った所に在る建物  
へと入つて行くロープ。

もちろん私も付いて行く。

離れ過ぎると、またあの苦痛が私を襲つだろし、逃げ場も無いし  
ね。

建物、結構立派な洋館入つたロープは、やつとそのロープを脱ぎ  
捨てた。

「 「 「 お帰りなさいませ、『主人様』 」 」 」

そして何処からともなく、メイド勢の挨拶が

「へ、変態だ」（ボソ）

「そこ… これは俺の趣味じゃないからな、勘違いするな」

だつてメイドに御主人様とか呼ばれて悦んで、もとい喜んでいる  
ような人種つて変態以外になんと呼べば……変態紳士か！

つてか初めてローブの素顔見たかも。

普通だつた、地味、さつきの王様に似て……は居ないな。

金髪ショート、よく見かける。

碧眼、テンプレですね、分かります。

身長も普通、体格も普通。

結論、平凡。

「大体、此処に居る奴らはお前と同じ奴隸だ」

やつぱり変態だ！――！

逃げ出やつとしたのこ、あつさうと捕縛される。

「待て待て待て！ 何か勘違いしてないか？ ここつらは全員商品  
だ、これから始まる祭りでのな」

ああ、なるほど。

そして私も売られるんですね。

でもやつぱり変態ですかよね。本当にありがとうございました。

## イメトレ

ローブに連れられて密室へじき処に入る。

メイドさんがお茶を持ってくる。

谷間、いいなあ～ってオヤジか私は……

お茶も美味しい。紅茶っぽい味、ちなみにノンシュガー、ノンミルク。

「まあお前の待遇についてだが」

「待つて」

「成り行きとは言え なんだ？」

どうしよう。

止めたは良いけど、説明して信じてもうんざりしちゃうか。

ローブが 今はローブ着て無いけど 割と良い人で、身分もしっかりしているのは分かったんだけど。

イメージしてみよう。

『実は……私異世界から來ました』

『医者は必要か?』

ダメだな、頭悪いとしか思えない。

テイク2

『祖国に帰りたいんですけど』

『送つて行つていやる!、祖国は何処だ?』

『たぶん、異世界です』

『…………医者は必要か?』

どうしてこうなった……

テイク3!

『この人痴漢です！』

『何を……つ！』

『キヤー！ タスケテー！！ オソワレルー！！！』

ドタン！ バタン！

『医者を呼べ！』

まあ、勝てる訳ないよね。

一回負けてるし、たぶん手加減されて。

テイク4！！

『ワタシ ノクニ ノコトバ ワカリマセン』

『ふざけるな』

今一番叫びたい言葉だよ。

ふざけるな！

もうと良い案は出でこないのか、この頭は！？

「何も無いなら話を続けても構わないか？」

「アーティスト」

此処は直球で行くしかない！

「お前聞いても直しいでしょ」つか

違うだろ私！ どうして聞いた！？

「そう言えばそうだな、俺はゲイル＝シユタットフェルド＝ファイン＝リースフェル。長いからゲイルで構わない。短い付き合いになる事を祈つて、よろしく頼む」

そして律儀に応えるなよ、そこのローブ――

助けて神ゴッド！！

『助けて、欲しいか？』

(え！？)

『力が、欲しいか？』

(いえ、力より知恵が欲しいです)

『この難局を乗り切る、力が欲しいか？』

(いや、だから力より知恵だつつてんだろーー！)

『ならば、授けよう

(いえ、もう帰つて下さい。ホント、何も要らんから帰れー！)

そして、私は閃いた！

「帰つても、いいですか？」

「.....」

イメトレ（後書き）

感想とかいろいろ待っています

## 言えなかつた言葉

ダメでした。

その後また説明ですよ。1時間くらい。

寝たい、眠い。

でも話はまとめる。

この仕事が無くなつたら、私が居る意味がないじゃない！

奴隸制度とは言つても、要は派遣社員みたいなモノらしい。

2級以上の貴族が浮浪児を拾つて来たり身売りを買い取つて、それを色んな所に売る。

つまり、浮浪児だと勘違いされて、私は保護されたらしい。

着用していた物がスウェットだったのも、勘違いの要因らしい。  
この国、と言つよつこの世界の女性はズボン履かないとかなんとか。

要するに、そんな事も知らない子供（東洋人は若く見られるつて本当だった）が森に居たら普通保護しますね。

ちなみに、3歳以上若く見られた年齢については訂正しなかつた。

説明を続けよう。

奴隸には1年の拘束期間が在り、その期間が過ぎれば自由の身、そこで働くもよし、また契約主、つまり2級以上の貴族の処に戻つて来て、新たな雇い主を探すもよし。

1年以内に逃げ出そうとしても、刻印があるため逃げる事は出来ない。

買い取つた側は奴隸を大切に扱つてゐるらしい。

2級以上の貴族相手に喧嘩を売るバカはいないし、2級以上の貴族は性格面も評価の対象になつてゐるため、よっぽど上手くやらなければ、王様権限で即3級落ち、運が悪ければ奴隸の仲間入りだつてあり得る。

信用で成り立つてゐる世界だね。

通信網とか、そこまで発達してゐる訳でも無いみたいだし。

余談になるが、この話の途中で、私の脳内変換が『奴隸』という単語を『派遣社員』に変えてしまうという事があった。

無理やり奴隸に戻したけど。

最初はラッキーとか考えてたんだけど

派遣社員の刻印とか言われてみれば分かる。

情けなさ過ぎる……

脳内変換は私のイメージと強い結びつきがあるらしく、私のイメージが単語の意味を変えてしまつらしく、

つまり、この世界で『奴隸または派遣社員』と言つた単語が有つたとする。

その単語のイメージが奴隸に近いと思つていれば『奴隸』と脳内変換され、派遣社員に近いと思つてしまふと『派遣社員』と脳内変換される。

まあ、奴隸と呼ばれるよりが心は自由。

私は自由に生きる！

そして現在、私は屋敷の部屋の中。

外は既に闇の中。

どうしてこうなった……

あ、ポテチ食べよ。

コーラ 温い……

ま、仕方ないか。

ポリポリ、カリカリ。

「クッ、うむ。

面倒だし、明日考えよつ。

豪華なベットに潜り込んで寝る事にする。

きっと、全て夢だ。

目が覚めれば何時もの天井を見上げ、何時も通りに学校へ行く。  
他愛も無い話で盛り上がり、退屈な授業を受け、放課後は道草しつつ家に帰る。

そんな明日が

来ないよねえ……

窓から差し込む朝日で目が覚める。

「見知らぬ、天じょ

」

「おっはよ～新入り！ 朝だ、起きろーー！」

私のセリフを返せ、一度は言つてみたかったのにーー！

「起きろサヤ、ゲイルが呼んでる！」

ゲイルが？

何の用だろ？

大体の説明は昨日聞いた筈だけだ。

## 言えなかつた言葉（後書き）

フラグ ポテチとコーラ

回収しました

「スプレーじゃないから！」

異世界何度目かの朝。

変態貴族の家一日田の朝。

現在、私は厨房に居ます。

何故かつて？

それを説明する為に、時間を少し戻そう。

「全員集まつたようだな」

玄関ロビーに集められた15人の執事とメイド。

もちろんその中に私も居ます。

黒を基調としたロングスカートのメイド服着て。

振りるとかは少なめ。

実用性重視つて感じ。

そう、だからコスプレじゃない、これはコスプレじゃないんだ！

「祭りは明後日から一週間行われる。その期間中にお前たちの雇い主が決まる訳だが」

祭りか〜、楽しそうだな〜。

屋台とか花火とか出るのかな？

無いならアイディア料とかで金とか貰えないかな。

でもこっちの金銭感覚とかまったく分からぬしな〜

「……………と云つて、最終試験を行つ」

……………は？

「はいー。」

「どうした、サヤ」

勢いよく手を挙げた私を見つめる3人の瞳。

しかし、そんなフレッシュシャーに屈する私じゃない。

「意味が分かりません！」

「…………昨日も説明したと思つただが」

待て、昨日？

思に出せ、やつと思こ出せ。

私はやればできるやつ。

……………あ――！

そう言えば何か言ってたな。

奴隸としての適性検査がどうとか。

ローブ改めゲイルによると

面倒だな、三行でまとめよう。

ゲイル結構偉い人。

奴隸を買う側も良い人材求めてる。

ゲイルにもプライドとか信用とかあるので半端なモノは売れない。

確かにこんな感じだつた氣がする。

「思い出しました。で、私に何をしあと?」

「それをこれから説明するんだ……」

若干の呆れが混じる声に少し凹む。

眠がつたんだから仕方無いでしょ。

またまたやつて来ました、まとめの時間！

何？ 別に待つて無い？

聞いてくれないと、内臓<sup>うちうら</sup>ぶちまけちゃうぞ

もちろん、お前の内臓を

と言つても、今回は一<sup>イ</sup>行で終わる。

家事。

礼儀<sup>れいぎ</sup>。

これだけ。

食材については見てみないと分からな<sup>イ</sup>いが、礼儀<sup>れいぎ</sup>なら任せ<sup>ハセ</sup>。

全く出来ない！

大体貴族？ 何それバカなの死ぬの？

むしろ死ねばいいのに。皆死ねばいいのにー。

出来なくても1年間また頑張ってください。

つていう救済措置があるらしいから、まあ、問題無いと思いたい。

ちなみに、3年間貰い手が付かなかつた場合、捨てられるらしい。

結構シビアな世界だよ。

今年は無理だと諦めてる私としては、来年に向けての予行練習つて感じかな。

それから、悩んでいた今後について。

まず情報が足りない。

動こうにも右も左も分からん状態じゃ動きようがない。

私が何故此処に、この世界に来たのかも分からんし、田立ち過ぎるのも良くない。

偶然この世界に来ただけならまだ良い。

誰かに喚ばれてこの世界に来ていた場合、これが問題だ。

その喚んだ人間は、私を利用しようとして喚んだ確率が高い。

何より、説明が面倒。（ここ重要）

私の説明だと、病院送りにされるのが火を見るよりも明らかだし、万が一信じて貰えたとして、それじゃあどうしようと話になってしまつ。

異世界人だとバレないように、地道に情報を集め、帰る方法を探す。

これが当面の目標といつか、方針。

だつたんだけど……

「スプレーじゃないから！」（後書き）

感想 指摘 いろいろ待っています

これは無い。

何これ？

これが厨房？

バカにしてんの？

食材はある、見た目だと何が何だか分からんけど。

調理器具もある、包丁、まな板、フライパン、見た感じ一通り全部。

調味料が無い、食材本来の味？ 化学調味料万歳！

つて事で、困った。

塩と胡椒は見つけた。

最初は塩も胡椒も見当たらなくて、バルとかゲシの実とか書いてあつた瓶を見つけ、何か分からんかったから、舐めてみた。

結果、バルが塩、ゲシの実が胡椒と判明。

私の脳内変換は固有名詞に対しても上手く働かないという事も判明したが、分かつた瞬間、バルが塩、ゲシの実が胡椒と脳内変換されるようになつた。

印象によつて変換内容が変わる弊害らしい。

そんなどうでもいい事は置いといて。

調味料が少なすぎる。

移送中は現地調達が基本で、こんなもんかと諦めていたのだが、昨日の夕食も良く言えばシンプル、ぶっちゃけ質素なモノだつた。

それでも美食に対する希望は捨てきれず、奴隸に対するはこんなもんかと思っていたのだが、調味料の少なさを見て原因が判明。

これは料理自体もそこまで発展してないと想像できてしまう。

ゲイルと言つ結構偉い貴族でこれなのだ、一般家庭には塩と胡椒すら無いかもしれない。

これは情報収集と並行して、調味料の発見と普及にも手を出さなければ！

むしろ情報収集は料理中心で、この世界の情報？ 食材と調味料  
さえ分かればこっちのもんだ！

しかし、困ったな。

何を作ろう。

私の周囲では既に料理を始めている人もいる。

試験は3つの班に分かれて、家事、礼儀を順番に審査されるらしい。

私は第一班。料理の後にお茶入れ、掃除と洗濯。休憩入れて礼儀の試験。

最初の課題は一品料理。

評価対象は見た目と味。

適当に野菜らしきモノを手に取る。

醤る。

あ、これ人参だ。

色は白く、大根の様な大きさだったが、味は人参だった。

他の食材も適当に選んで醤つてみる。

判別できた食材は、最初の大根の様な人参、キャベツの様なタマネギ、そのまんま長ネギ etc etc。

トマトの様な生姜を齧った時点で判別は諦めた。

普通に涙出た……

肉や魚介系は生で齧る訳にもいかないし。

まあ、適当に作ろ。つ。

齧り判別した食材を適当に集め、肉は未知数なので避けて、魚介系で固める。

これまた何の卵かは分からんが、味は大して変わらないだろうと思いつつ使う事にする。

米はあつた。

乾燥させて蜂蜜やら色々な栄養食と混ぜて兵糧にしたり、粥にして病人食や離乳食として使われているらしい。

一般人はあまり食べないとの事。

魚貝や野菜を同じ鍋で下茹で、その間に鍋でご飯を炊く。

これでも独り暮らしで自炊、バイト先で厨房を手伝っていた経験がある。

料理なら適当にやつても、それなりのモノが出来る。

即席魚介系ダシ汁をフライパンに出して煮詰める。

水分を出来るだけ飛ばしてからじゃないと、ベチャベチャになって味も見た目も悪くなってしまう。

ご飯が炊ける頃合いを見て、野菜を切り始める。

ダシの水分がそこそこ飛んで来たところで野菜を炒めつつ、魚介を適当に切つて入れる。

火力も申し分ない。

まあ、何とかなりそうだな。

周りからの視線も気になり始めたし、さっさと仕上げてしまおう。

そして、完成した料理はゲイルが待つ部屋へと運ばれて行く。

予想してた人、その通り、炒飯作りましたよ。

味見はしたが出来はそこそこ、不味くはないが、やはり何かが足りない味だった。

普通に涙出た（後書き）

主人公最強までどれだけかかることがへへ；

感想とか待ってます

## 一番大事なモノは『食』

なんか疲れた、巻いて行こう。

お茶の準備。

適当に入れる。

紅茶？ 日本茶以外、飲みませんから。

次、洗濯。

実家には洗濯機が無かったので懐かしい気持ちになつたよ。

洗濯板……同士よ……！

昼休憩、ひま。

礼儀。

まったく分からんかつたよ。

日本の礼儀はそれこそ叩き込まれてはいるが……

西洋のそれは分からん。

着物を寄こせ！

以上、ダイジェストでした。

そしてベットイン！

「あ～、疲れた～、温泉入りてえ～」

この世界は基本タオルで体を拭くか川で水浴び、ちょっと豪華でシャワーを浴びられる程度の水道設備しかない。

温泉が湧いている所も探せばあるかも知れんが、天空の城に水道設備は期待できない。

温泉は年内に見つけられればいいが、シャワー設備は出来るだけ早く欲しい所だ。

料理については、朝から研究しよう。

ダシは欲しい。

魚介系は割と上手く行ったので、今日の余りに色々足してみよう。

小麦粉に似た物はあったので麺類を作つてもいいかもしね。

ラーメンやうどん、でも肝心の醤油が無いんだよな。

米はあつたし、味噌ぐらうならあるかも知れん。

何か大事な事を忘れている気もするが、今日は疲れた。

合格発表は明日の朝らしいので、今日はまちつ寝る事にしてみよう。

「お姉ちゃんまた負けたの？」

大の字で畳に転がっている私を見下ろす妹。

妹よ。ボロ雑巾のような姉を見て、そんな笑顔で言う事かね。

この感覚だと、左腕……3日は使い物にならんない。

「抗つてないで、身を任せちゃえぱいのこ」

その感覚が分からん姉に過度な期待はしないで欲しい。

「紗希、次はお前の番だろ?」

「あ、ホントだ! 教えてくれてありがと、お兄ちゃん

兄がいつものシケた面で私の横に腰を下ろす。

「またボロ雑巾か」

悪かつたな、どうせ落ちこぼれですか?」

「お前は本家では唯一まともな人間だからな、出来るなら家を出た  
方が良い」

実の妹にそこまで言ひますか?」の兄は

「勘違いするな、善意で言ひてやつてるんだ

善意の押し売りは迷惑だよ。

私だつて才能が欲しい。妹の半分でいいから。

「お前、血の衝動が無いだろ」

あ〜、やつぱり分かる?

無いんだよ、まったく、これっぽっちも。

「潜在能力ならお前の方が上だと思つてたんだが、それを活かす才能が無いんじや笑えないな」

悪かつたな、才能なくて。

「妹は100年に1人の天才だとか言われちゃいるが、俺でさえ壊れるとしか言つようが無い」

可哀想だよ、と呟く。

体を起こし、妹の戦いを見る。

それは試合では無く死合、稽古では無く殺し合い。

それでも、妹は楽しそうに、愉しそうに笑っている。

何だろ? うね、この劣等感は、人外魔境だよ。

「お前は家を出る。まともでいられる内に、こんな壊れた血筋とは縁を切つた方が良い」

その後は、他愛もない雑談。

意識が霞む。

ああ、夢か。

## 驚異の着衣（前書き）

この話はフィクションです  
実際の（ ）

## 驚異の着衣

ベットから這い出る。

懐かしい夢を見た。

しかし、気分は最悪だ。

実家の事なんて今更、思い出したくも無い。

私は普通に暮らしたいのだ。

家を出るとは言われたが、まさか世界を飛び出すとは兄だつて予想してなかつただろう。

私だつて予想して無かつたよ。

妹は壊れた様に元気だろうか。

兄はシケた面だろうか。

思考がまとまつてないな……

久々に早朝鍛錬でもしようつと着替える。

メイド服では無く、此方に唯一…………ではなかつたけど、持つて  
来れた現代の品。

ポテチとコーラは食べちやつたし、残つてゐる現代品はこれだけ  
だ。

伸縮性抜群、通気性はそこそこ、寝巻に最適。

スウェットである。

「ソソソソしながら庭に出ると、誰もいない。

当たり前か、都合は良いので、そのまま練習に入る。

無銘流。

厨一臭い名前だが、実際には戦国時代から続く由緒正しい流派で  
もある。

鍛冶屋が銘を刻まなかつた様な駄作でさえ扱う事から、この名前  
が付けられたとか何とか。

もともとは領主を失い落ちぶれた武芸者達が寄り集まつて出来た流派らしく、どんな武器、武術、技術でも扱えるように鍛錬し始めたのが始まりらしい。

江戸時代でも何度か歴史に関わる様な偉業を成し遂げたらしいのだが、その名が歴史に残る事は無かつた。

名前の通り、無名で無銘。

利用された後は捨てられるだけの流派である。

適当に思考しながら体を動かす。

型も無ければ、構えも無い。

どんな武器でも扱えるよう<sup>。アリ</sup>。

どんな武術でも扱えるよう<sup>。アリ</sup>。

一通り体を動かし、部屋に帰ろうと息を整える。

「見事なもんだな」

「見学なら、もう終わつたんで帰れ、暇人」

「契約主にその態度は無いんじやないか?」

覗き見しているような変態紳士ゲイルに礼儀は必要ない。

「今めちゃくちゃ失礼なこと考えなかつたか？」

「何を仰るんですか、わたくし私の態度に何か失礼な部分があつたのなら素直に謝罪をしますが？」契約主である変態貴族のゲイルさん

「ヤレヤレで言われるとは流石に予想していなかつた……」

地味に落ち込んでいる様だ。

「昨日作った料理は國のモノか？」

適当に話を合わせながら受け答えする。

早く汗の処理したい、べたべたする。

やつぱり朝鍛錬なんてするもんじゃないね。

誰だよ、朝鍛錬とかやり始めたのは……私が。

寝起きの私を殴り飛ばしてやつたいね。

「……でな、俺の、つてちょっと待て！」

「え、何？ 私早く部屋に戻つて一度寝したいんだけど」

屋敷に戻るうとした私を引き止めるゲイル。

「いや、もういい

まつたく、何がやりたいんだろうね、この変態貴族様は

「何度も言つがアレは俺の趣味じゃないからなー！？」

「勝手に思考読まないでくれますか？」

「思いつき声に出てたからな、まつたく」

今度こそ、私は屋敷に自分の部屋に戻るために歩き出す。

疲れた、汗拭いたらもう一回寝よう。

驚異の着衣（後書き）

感想 アドバイス 冷やかし 待つてますよ～

## 重大なお知らせ

合格発表。

諦めてる私でも緊張するんだ。

他の人たちの緊張感は半端無いだろうね。

またも玄関ロビーに集められた私含め15人の執事とメイド。

これから変態貴族ゲイル様からのお告げ、もとい合格者発表である。

合格者は明日から始まる祭りで売られる為の準備を始めるらしい。

合格でも不合格でも待っているのは地獄ですね、分かります。

「全員揃っている様だな」

ゲイルが階段から下りてくる。

「今回の合格者だが

」

緊張の一瞬。

「全員合格とする」

え？

今なんと仰いましたかこの変態は。

全員

合格？

「変た………ゲイルさん、質問ですか？」

「何を言い直したのかはあえて問わんが、何だ」

「全員合格つて私も？ 私礼儀とか全然できなかつたんだけど」

「ある程度できていれば問題ない。後は実地で覚えろ」

あ～、なるほど。

判断基準は私が考えてた異常に低かつたらしい。

確かに料理とか「それは生ごみですか?」って聞きたくなる様な物もあつたし、そんなもんか。

いや待て、つて事はなにか、私売られるのか……

奴隸生活かあ～。

人権とかあるのかな。

酷い扱いは受けないって分かってはいても、私の知識だと奴隸つてイメージが、愛玩ペット的なね。

いや、これ以上は何も言つまい。

流れに身を任せてしまおう。

「全員荷物はまとめておけよ。使っていた部屋の掃除も忘れるな

言い放ち去つていいくゲイルの後姿眺めつつ、海が見える所に住

みたいにな~とかどうでもよく考えて~いる私である。

此処で重大なお知らせ。

この世界の情報まったく集めてねえ！！

忘れてた。

そんな私は今何をやっているかって？

ダシ、取ってます。

「うちのお肉は面白いね。」

煮ると色が紫になつたり、焼くと良いダシが取れたり。

ラーメンの様な物も作つてみた。

お届はそれをみんなに振る舞つた。

味は塩。

味噌とか醤油とかは無かつたのでこれは仕方ない。

「」には麺つて概念が無かつたので、最初は恐る恐る口を付けていた皆（ゲイルは除く）も、食べ始めれば口も利かずについ勢いで食べていた。

もう夢中になつてましたよ、ええ。

現時刻は夕方、明日は祭。

この世界の常識ぐらいは仕入れておくべきだと、事前に調査しておいた書庫へと向かつ。

今までは他の人を模倣しつつ生活できていたのだが、これから向かう所に私以外の奴隸や使用人がいるとは限らない。

最低限の常識やマナーはそろそろ覚えないといけない。

既に手遅れとか思つてないよ、思つてない、思つてない。

## ロープ大好き

周囲を確認。

右、誰もいない。

左、誰もいない。

上下、居る訳ないな。

扉を開け、書庫に入る。

「やあ」

「あ、失礼しました」

書庫を出て、扉を閉める。

誰だらう、誰か居た。

黒いロープ着てたけど、この世界の人はロープ大好きだな。

まあ、ここで情報を集めなくても、きっと大丈夫さ。

今日は大人しく帰

「待ちたまえよ

「ゆ

つ！？

横から声をかけられ、飛び退きながら、その相手に對して構える。

「そんなに身構えないで欲しいなあ

「誰」

端的に返す、もちろん警戒は解かない。

「う～ん？ 誰って聞かれてもなあ…………『めいたんてい迷探偵』ヒドも名乗つ

ておこづ

「探偵？」

「いやいや、迷探偵。迷い、迷わせ、迷い込む。ボクに任せておけば、全ての事件は迷宮入りわ」

それは探偵では無いのでは？

「だから、『迷』探偵。迷い、迷わせ

」

「コイツ、心が読めるのか！？」

「探偵と言つるのは状況を理解し、相手の顔色を探るのが仕事だからね。キミの表情は分かりやすくて助かるよ」

なんだ、驚いて損したよ。

「どうちこしる、事件を解決しない探偵に意味は無い氣がするのは、私だけだろうか。

「だから言つているだろ。迷探偵だつてね」

「あ～はいはい、その迷探偵様がどうして此処

」

「そうだ、どうして此処に居る？」

「こゝは腐つても上空何千メートルの位置に在る筈だ。

そこに侵入してくるにはそれなり以上のモノが必要なはず、まして、こゝは変態でもゲイルと言う貴族の屋敷。

生半可な防犯設備だとは思えない。

「まあ、立ち話も何だし、中に入らう」

まるで自分の家であるかのように、書庫の中へと入って行く。

怪しそうだ。

私を書庫の中に招き入れて何をするつもりだ。

「キミ、この世界の住人ではないだろ?」

つー?

何故、それを知っている。

私は誰にも言つて無いはずだ。

「ほり、廊下では都合が悪いだろ? 中に入りたまえよ」

確かに都合が悪い。

廊下では誰に聞かれてもおかしくない。

口封じする人数が増えるのは面倒だし、従つ振りをしつつ、隙を

窺つて

仕方なく書庫に入り、扉を閉める。

## ローブ大好き（後書き）

新キャラです

心躍ります

感想待つてます

「バカにされてる気がする

「初めてに言つておこう。基本的に、ボクはキミが異世界人だという事を広めるつもりはない」

迷探偵は本の山に腰かけつつしゃべった。

身長は低め、年齢は同じぐらいだろうか。

顔は中性的だが、ローブを押し上げる胸の大きさから見て、男性はありえないだろう。

殺<sup>や</sup>る事に、躊躇つ理由が無くなつた。

「それで、そんな事を言つたのにここに来た訳ではないのでしょうか？」

「話が早くて助かるね。キミは頭が良いうじい

「何だろ？、バカにされてる気がする。

「まず、何故私がキミの事を『識つて』いるのか』って事を説明しよ。そっちの方が、話が速そうだ

それは是非とも聞いておきたい。

今後、口封じ もとい、説得する相手が増えるのは好ましくない。

「ボクは千里眼と心眼、精靈眼や魔王眼を駆使して世界を見てるからね」

「おつと、何だらう」の厨一…………困ったな。

「おいおい、なんだその痛い人を見る日は、普通はもっと驚くとこああ、キミは異世界の人だったね」

もしかして、キミの世界では有り触れた物だったのかな？ それとも魔法とかが存在しなかつたのかい？ と言つて葉に後者だよと頷く。

「仕方ない、こいつの世界の常識を簡単に説明しよう」

当初の目的だった世界の常識ゲットー

「この人怪しい人だけど良い人だったよ。」

キミの世界の事は知らないが、といつ前置きと共に始まる簡単な講義。

この世界では魔法が生活基盤になっている。

魔法とは生まれつきの才能にも左右されるが、基本的には誰にでも使える物。

そして、自称迷探偵は才能の塊。

とってもファンシ…………じゃなくて、ファンタジー。

私にも魔法つて使えるのかな？

そのあたりも教えてくれると助かるんだけど。

「基本はこのへん」、あとは自分で調べたまえ

何この役に立たない人。

「ボクがどれだけ説明した所で、キミは全て信じる訳ではないだろ  
う？」

現に今だつて、9割は疑つてゐるはずだ。つて、何で分かるんだ  
ろ、う。

ああ、探偵だからか。

「それで何故、キミの事が分かるかつて話に戻るんだが

」

そうだ、そこが一番重要だ。

「キミの事が、ボクには見えないからさ」

は？

「確かに、肉眼でキミを捉える事は出来る。でもね、魔術的な視点、  
視界を通した場合、キミの事は分からんんだ」

大事な事なのでもう一回…………は？

見せる方が早そうだ。と言いながら、迷探偵の眼の色が次々に変  
わっていく。

最初は黒だつたが、次は赤、緑、青。

カラフルな瞳をお持ちですね。

瞬きする度に代わる瞳の色に、しばし呆然とする私。

「まあ、説明はいいや、面倒だし。今見てもらつたのが精靈眼や竜王眼と言った、凡才が100年努力しても辿り着けない魔術の秘奥、最終形態と言つてもいいかもしね」

へえ〜。

スケール大き過ぎて、どう反応すればいいのか分かんねえや。

「要するに、ボク以外にキミを発見出来る様な人物は居ないって事で大丈夫だよ」

なるほど、分かりやすい。

「そろそろ、その殺氣を抑えてくれると助かるんだけど」

飛びかかる。

右手で真直ぐに頭部を、左手は体で隠しながら腎臓を狙う。

しかし、その手は届くことなく、体<sup>じ</sup>と見えない空気の壁の様な物で阻まれる。

「ああ、取引をしよう」

「内容による」

不味い、完全に向こうが有利。

体は宙に浮いた状態で止まってしまった。

そして、相手の表情が真剣な物になつたのを見て、これが本題だと理解する。

「キリには、未来を変えて欲しい」

バカにされてる気がする（後書き）

後4話くらいで新章突入

できたらいいなあ……

ということは、主人公の目的がやつと決まりそうです

## みんなのお天気お姉さん

3年後、この世界で大きな戦争が起ころる。

王国対帝国。

泥沼状態が2年以上続き、勝敗は迷探偵でも分からなかつた。

その未来は変わつたらしい、私がこの世界に出現した瞬間に。

戦争の早期終結は確定したが、どちらが勝つかは半々。

どうも私が鍵を握つてゐるらしいのだが、詳細は不明。

私は平和に暮らせりやいいんだけどね。  
つてかそろそろ下ろして欲しい。

宙に浮いたままつて意外と気持ち悪いし。

「取引の内容は2つ。1つ目、戦争の回避。2つ目、万が一戦争が起こつた場合王国側に付く。その代り、キミが元の世界に戻れるよう手をつくすし、キミが異世界人だと周囲にバレないようにもして

あげよ'っ

まさか、コイツが私をこの世界に喚んだとか？

その可能性も考えながら考慮しな

「ちなみに、この取引に乗らないならボクはキミが異世界人だと世界中に言い触らす」

何その脅迫！

「ボクはキミを喚んだ人間たちに心当たりがある。と言つよりも、ほぼ特定できているから」

まずいマズイ拙い不味い。

完全にペースは向こう側。

切れるカードは微塵も存在しない。

「ああ、キミをこの世界に喚んだ理由なんだけどね。たぶん戦争で利用しようとしてるんじゃないかな？」

「そいつらを殺せば、簡単に戦争を回避できるんじゃないの？」

「運命つてのは単純だから」  
「、その強制力は半端なモノじゃないんだよ。仮に殺したとしても、他の奴らが戦争を起こすだけさ」

まあ、今のキミには理解できないだろうねと、自嘲気味に囁く。

じつにしろ巻き込まれるのは確定。

最悪、戦争を回避しようとしてるコイツと手を組んで後悔するか、戦争に参加してから後悔するかの違いでしかない。

「具体的に私は何をすればいいの？」

「今はまだ、何もしなくていいよ」

今はまだ、ね。

「異世界人だとばれない様に生活してくれれば当面は問題ない。ボクはキミが動く事によって変わる未来つてのを楽しませてもうつよ」

なんて性悪。

絶対腹黒いよ、この女。

悪女だよ、まったく。

「交換条件」

「ん？ 大抵の事だつたら叶えてあげるよ」

「帰る方法の模索と情報の隠蔽以外に、この世界の知識と戦争が起  
きるつて事の証拠を、それから早く下ろして」

ああ、「じめん」「めん」と言いつつ魔法（？）が解除される。

さよなら空中、ただいま地面。

「！」の世界の事なら「いくらでも教えてあげよつ。それから証拠につ  
いてだけど…………そうだな、明日からの天氣を当てたら信じてくれる  
かい？」

「何そのお天氣お姉さん。それぐらい信じられたら警察要らんわ  
つて、こっちの世界だと警察とか居るのかな？ 自警団とか騎士団  
は居そうだけど。」

「たかが天氣だとバカにしてるだろ？ けど、これでも完璧に当てら  
れるのはボクぐらいだろ？ うね」

「…………」

「いつの世界の判断基準がないから何とも言えないな。

「一応伝えておくと、明日から三日間は晴れ、四日目は夕方から雨、五日目の昼まで降り続いて、夕方には晴れるだろうね。六日目、七日目は曇りだけど雨が降る事は無いよ。たまに晴れ間も覗くはずさ」

週間予報か。

確かに完璧に当つていれば凄いとは思うんだけど。

私、売られて何処に行くのか予想も出来ないし。

「まあ、信じるか信じないかはキミ次第だよ。信じてもらわなくても、無理やり巻き込む事になるだろ？からね」

うわあ、何この人、恐い。

「分かった、協力はする。でも信用はしないから

「どうしてお巻き込まれるんだつたら、味方だと思わせておいて背後からつて手もあるしね。

「それはよかつた。ボクも不本意な手は使いたくないからね

この悪女とはもう一生分の会話をした気がしますよ。

一番関わっちゃいけないタイプの人間ですよね、絶対。

## ■面白やつだから（前書き）

2話同時ですので、読んでない方は1話前からお願いします。

## 面白そうだから

それから私は、この世界の事について聞いて行く。

もちろん、後で自分で調べるけどね。

ここからは長くなつたので要点だけまとめようじゃないか。

ああ、このまとめも久しぶりな気がするよ。

体感時間では3年くらじ経つてる気がする。

心が安らぐね。

まず、魔法について。

主に帝国が使つて いる ヒンショント・ラン 古語。

帝国語の基になつたとも言われていて、短い詠唱で大きな効果を發揮するが、魔力消費が大きいのが特徴。

次に王国が使用している魔語。

いろいろ混ぜた結果生まれた一番使い勝手の良い物、呪文や魔法

陣、魔法回路を使用して相乗効果を発揮させるのが特徴。

後は教会が使用している神語や精靈が使っているといわれている  
精靈語、竜が使用しているらしいう竜語などなど、個人、個別に分け  
て行くと切りが無いのでメジャーなところだけ紹介しました。

この説明中に、私はどんな言語でも理解でき、話せる事が分かつ  
た。

迷探偵には帝国語、王国語の一いつが理解できていれば十分とか言  
われたけど、どちらも日本語に脳内変換され、日本語で話そうとし  
ている私としては、実感がまったくない。

結論、どうでもいい。

次、各国情勢について。

今は平和そのものって感じらしい。

帝国は静かだし、教会サイドも中立を通している。

王国は内輪で揉める事も無く、寧ろ王がもうすぐ死ぬって分かつ  
ているからその関係で忙しいとかなんとか。

その他の小国家も何をするでもなく自国の繁栄に忙しくて他に手  
を出す余裕がない。

最後、私を巻き込む理由について。

面白そ�だから。

はい、本音頂きました。

まあ、それが全てでは無いだろうが、8割は本気だったね。

あの口調だと。

「じゃ、期待してるから」

語るだけ語つた迷探偵は、もつ帰るらしい。

はいはい、やつやと帰つてくれ、自分の星に  
つて此処がそ  
の星か。

普通に扉から出て行く迷探偵。

ちよつと待て！

扉を開ける。

書庫に入る前と変わらない、静かな廊下。

右、誰も居ない。

左、やつぱり誰も居ない。

そこには迷探偵の影も形も無かつた。

何処から来て、何処へ行つた。

まあ、また会つ事になるんだが、今氣にしても仕方ないか。

寝よ。今日はもう疲れた。

部屋へ帰る私の足取りは、たぶん異世界に来てから一番重かつた  
と思つ。

## 面白そうだから（後書き）

1万PV感謝を込めて、一話同時掲載です！

と言つても、こいつの文量は少なめなので、特に何がつて訳でも無い  
です

ただ丁度良くなつたので、1万PVに合わせて公開

私、奴隸になりました！

迷惑な探偵との出会いから一夜明けて、運命の日。

晴れたよ、これ以上ない位の快晴ですね。

チチ週間天気予言は当たつた。（まだ初日だけどたぶん外れない）

世は祭り日和。そして私の奴隸ライフは絶望日和。

今日から1週間の間に私は売られるらしい。

初日の奴隸市場は調査なんかがメインで、買う人は少ないらしい。

一日目から四日目は個人売買、五日目からはオークション形式で売られて行くとの事。

私はてっきり露店開いて叩き売りとかするのかと思つてたよ。

ゲイルがそんなことしてたら　完全に変態ですよね、わかります。

ゲイルに知り合いが多く、ゲイルの商品自体も人気で、オーパショニに商品が並ぶ事は稀で、個人売買でほとんど売れてしまうとかなんとか。

今日一日は城で待機を命じられている。

奴隸の刻印の設定をこの空中屋敷に設定し直しきでていたけど、構造とかどうなってるんだろうしに行つた。

私達も連れてけ。

つて感じに騒がしかと思つたけど、やめた。

今日は一日寝ていよつとベットに横になり、ゴロゴロしている。

いつもに来てから色々な事が在り過ぎて、頭の中が整理できていない気がする。

まず現状を整理してみよう。

奴隸。

以上！

あれ、どうしてこうなった？

まだ何があるはず。

変態貴族に軟禁状態。

3年後の戦争（予定）

自称迷探偵のお氣に入り。

おかしいな…………

私の平穏は何処に行つたんだろう。

これからについては追々考えるとして、落ち着いたら手紙でも書  
い。

生みの親では無く、引き取ってくれたお父さんとお母さん宛で。

壊れかけていた私を引き取って、此処まで育ててくれた両親。

一人暮らしをしたって我儘まで叶えてくれたんだ。

きっと心配…………はじてないだらうけど。

届くかは果てしなく不安だけど

迷探偵にでも頼めば何とかしてくれそうな気がする。

次に会つのはもう遠くない予感もあるし、その時にも頼めばいい。

書きだしは、そうだな

私、奴隸になりました！

私、奴隸になりました！（後書き）

第1部（完）

次回作に（つづく）

いえ、まだ続きますけどね

次は閑話をちょっと入れて、第2部始めたいと思います

閑話では視点が違えば主役級

作者が違えばきっと主役の人々たちが活躍する

予定

真下に見えるのは先程まで会話していた少女の頭部。

右を確認、誰も居ないね。

左を確認、まあ、誰もいないだろ? うね。

ボク、上に居るから。

流石に上下までは確認せず 確認する奴がいたら見てみたい  
モノだけどね 疲れ切った様子で、自室に帰つて行く。

これから楽しくなりそうだよ。

あの娘を発見出来たのは本当に鶴<sup>ホトトギス</sup> いや、まあ、なんて言  
うんだろうね。

ちょっとある人物を観察<sup>ストーキング</sup>してたら、偶々見つけたっていうかね。

暇潰し兼八つ当たり兼気分転換に、彼を千里眼で追ついたら、  
彼が回収した女の子が誰も居ない空間と楽しそうに喋つていいじや  
ないか。

最初は頭おかしいんじゃないの?

とか思つたりもしてたけど、彼ですら誰も居ない空間に語り出す始末。

流石にボクの頭がおかしくなったんじゃないかってヒヤヒヤしたモノだ。

過去視や千里眼をフル活用して得た事実。

帝国側が実験していた召喚術。

アレが成功していたらしい。

帝国側も、ボクでさえも失敗したと思いこんでいた大規模召喚魔法。

街一つを全て犠牲にした胸糞悪い実験だった。

当然、失敗した研究員達は既に処分されているし、実験そのものも凍結され、世間には疫病が発生して街が壊滅したと公表されている。

召喚された彼女は、既に追われる理由が無くなっているなんて、思つてもいないう。

さつき話してみた異世界人の少女。

中々頭も回る。

勘も良い。

なんとかこっちの手札を見せずに協力体制は敷けたけど、裏を見れば嘘八百。

人はボクを迷探偵と呼びますから。

事実を巧妙に隠しつつ、さも事実であるようにでっち上げる。

僕の得意技もある。

戦争？ 何それ知らない。

大体、ボクが未来を予知できるのは一年先が限界だし、大勢の人  
に係わる事しか見る事が出来ない。

それでも十分凄い事ではあるけど。

祭りの時期で助かつた。

丁度王都で建国記念祭やつていってくれたおかげで、信用してもらえる様な話に運ぶことができた。

あの少女、サヤ＝ムラサメだつたつけ？

帝国側に渡すのは勿体無い。

帝国になんか渡したら、実験観察以下略の未来しか予想出来ないしね。

まあ、それなりに頭は回る方だつたし、ボクが王国側の人間だつて勝手に推測してくれているだろ？

ボクが王国側だと推測すれば、帝国が彼女を喚んだつて正解まで至るのはそう難しくない。

そうなる様に誘導もしておいた。

これで帝国に近づくよつたバカなら、それはそれで楽しめそうだ。

彼女と会えるのは、ボクの未来視が完璧なら最短でも一年後。

彼女がその未来をどれだけえるのかは予想出来ないし、見る事も出来ない。

それまでは気長に待とうじゃないか。

そう言えば彼女との契約。

戦争回避に協力してくれる代わりに、元の世界に返す方法を探す。

元々戦争なんて起きやしない。

なら、彼女との約束を守る必要も無い。

まあ、喚ぶのに街一つ犠牲にしているのだと、返すのにも同じだけの犠牲が必要だと知れば諦めるだろ？

余程の鬼畜では無い限りね。

事実、喚び方は分かつてているんだ、それを反転させればいいだけの話。

召喚呪文と召喚式は既に手元に在るから、半年も使えば返還の基礎は出来上がるだろ？し、さらに一ヶ月もあれば返還ぐらい余裕だらう。

その為に、街一つ、千人ほどを犠牲にする事になるだろ？けどね。

ああ、楽しみだなあ。

未来が分からぬ感覺つて言つのは久しぶりだよ。

これが人生。

これぞ人生。

人生を楽しむ為に、まずはそつだな

いの国の王子、彼をからかいに行こう。

## 迷探偵の裏話（後書き）

あらすじでも書いてある通り  
ただ売られ売られゆく話です

戦争？ 何それ知らない

つてな訳でここでネタばらしですね

作者は戦闘描写が苦手です  
戦争？ 無理です  
多人数 長期間とか  
マジで無理です

なんだつたんだろうな、あの女は。

いきなり攻撃を仕掛けしてきたかと思えば、不意撃ちだつたとは言え、簡単に無力化される。

アイリスを狙つて来た刺客かと思い、魔法で記憶を覗こいつとしても上手くは行かなかつた。

仕方なく奴隸の刻印で行動を制限すれば、何の抵抗も無く、王都までたどり着いてしまい、最後に王との面会にも連れて行つたのだが、特に問題も起こさなかつた。

流石に俺の勘違いだつたか。

少し罪悪感があるが、ムラサメにも問題があつたのだし、俺の商品が手荒な扱いを受けるとは考え難い。

「やあ！ 遊びに来たよ～

一息付いている所に、一番厄介な奴がきやがつた。

「何だいその顔は、とっても嬉しそうじやないか」

「迷惑そうな顔だ！ 大体、朝はおはようだうづが」

シャルティア・ローレライ、学園最強の魔法使いにして俺と同期であり、自称迷探偵の情報屋。

人は彼女を魔女と呼ぶ。

いつの間にか仲良くなっていたのだが、俺にとっては迷惑でしかない。

年齢は俺でも知らない。

確かアレは、出会いで間もない頃だったと思う。

つい口を滑らせた俺は、気が付いたら病院に居た。

何を言っているのか分からぬと思つ。

俺も何があつたのかが分からぬ。

ただ一つ『年齢を聞いた気がする』という、漠然とした記憶だけが頭に残つてゐる。

「なら言ひ直そうじゃないか、おはよつ、ゲイル」

「ああ、なぜやつ」

祭の最中に顔を出したと思つたら、それから今日までずっと居座つてやがる迷惑な友人だ。

流石に、その生活も今田で終わりなのだ。

「帝国の召喚実験の話だが

「またその話かい？」  
朝から血なまぐさい話はよしてくれよ」

その後の帝國の動向について

「その事はもう話したたゞ二三? ホケは何も知らんしよ」

「コイツが知らない訳が無い。」

むしろ、コイツは知らない事の方が少ない。

「黒龍を召喚して使役しようとして失敗。犠牲は約千人。生存者は

「皆無」

「ここまで簡単に調べる事ができた。

此方も事後処理や情報整理と忙しいのだ。

必要な時には居ない癖に、不必要な時には癖に居るシャルティアを睨みつける。

「へへ、良く調べたね。ボクは全く知らなかつたよ」

「意見を聞かせろ」

俺が真面目になつたのを見て、シャルティアも真面目な顔になる。

「そろそろ出発しないと遅刻するよ?」

「何を言つてこる。今日はいつもより早く

アイリスの事を忘れていた事を思い出し、急ぎ準備を整える。

窓から顔を出し、後ろ姿に向かつて叫ぶ。

「シャルティア、話は後で聞かせてもいいからな!」

「覚えてたらね~」

悠々と歩いて屋敷を出て行くシャルティアを見送り、妹の部屋の前で立ち止まり

祭から1週間くらい経過しています。

元気に暮らしてると良いな。

巻き込んでしまった少女。

わたしの所為で奴隸になってしまった女の子。

木の上から声をかけられたと思ったたら、いきなり飛び降りて奴隸  
商人　これはわたしの勘違いでしたが　を次々に倒して、  
それはもうカッ「良かつたです。

男の子だつたら惚れていたかもしません。

ああ、でも、わたしにはフィンが

赤面しているのが、自分でも分かるくらいに顔が熱い。

サヤは最初、ぎこちなく喋っていましたが、いつの間にか、王国  
標準語であるリストフェル語を流暢に話すようになっていました。

不思議な事もある物です。

王都に付く頃にはすっかり仲良くなつて、フィンの事まで話して  
しまいました。

サヤが居なければ、わたしは心細くて死んでいたかもしません。  
とっても仲良くなつたけど、今でも信じられない事が一つあります。

サヤの年齢です。

聞けば、サヤはわたしの一個上らしいのですが、如何見ても、何処から見ても、誰が見ても年下にしか見えませんでした。

でも、言葉の端々や時折見せる大人びた表情、何よりその気遣いに年上感が伺えました。

お姉ちゃんが居たらこんな感じかもしません。

理想のお姉ちゃんです。

残念な事に、わたしは一人っ子ですが、あんな人がお姉ちゃんだったなら幸せだろう事は想像に難くありません。

トントントン。

「はい、どうぞ」

ドアを叩く音に、反射的に返事を返します。

「今日から学園だろ？寝過ごしてないか確認しに来た」

「大丈夫です」

今、わたしは学園の制服を身に付けています。

とっても服に着られている感じがして、似合っていないのが自分でも分かります。

「開けて大丈夫か？」

「はい、どうぞ」

ドアを開け現れたのは、義母兄妹であるゲイル兄さん。

ゲイル兄さんも同じ学園の制服に身を包んでいて、わたしより一学年上の生徒だそうです。

今までは長期休暇中だったそうで、今日から新学期。

ゲイル兄さんはそれなりに仲良くなり、学園に知り合いが一人でも居るのは、とても心強くて助かります。

普通なら、もっと仲が悪くなつてもおかしくないと思つのですが、とても良くして頂いて、わたしの方が萎縮してしまいます。

堂々としていて、それでいて嫌味を感じさせない態度。

もつと普通でいいんです。

わたしは普通に生きて行きたいんです。

「朝食を食べたら出るが、ちょっと早いう氣もするが、教務室にも顔出さないとダメだらうしな」

「はー」

サヤは売られて、セントリア貿易都市に行ってしまい、一年は帰つて来ないそうです。

わたしはわたしで、この一年間はとつもなく波乱の予感しかしませんが、頑張るしかありません！

おさやるべれいとは

ぐ

「の鳴こてこむお腹を満足させる事ー



アイリスの新学期（後書き）

次回から新章突入ですよ  
奴隸生活編 ↗ そのバナナを私に寄こせ！（仮） ↗  
お楽しみに！

## 第一部までの設定（荒）（前書き）

作者が覚えておけばいい程度の設定です  
ぶつちやけ荒が多すぎてどうしようもない状態  
読まなくても全くストーリーには関係ありません

ネタバレはたぶん含みません

## 第一部までの設定（荒）

村雨沙耶（サヤ＝ムラサメ）

年齢 17歳

性別 女性

身長 160くらい

無銘流と呼ばれる武道の本家に生まれた落ちこぼれ  
天才の妹と秀才の兄を持つ

黒髪ロング ツリ眼 ツルペタ 童顔

徒歩30秒で行けるコンビニへポテチとコーラを買いに行つた帰り  
道で異世界へご招待

所持品はポテチとコーラ

スウェットは脅威の着衣

一言コメント

「要点は任せろ」

アイリス

年齢 15歳

性別 女性

身長 160

辺境の村から連れてこられた王様の隠し子

フィンと並つちょっと気になる異性の存在が心の拠り所

ふわふわ金髪ロング

ボイン

一言口メント

「わ、私そんなに胸大きくありません!」

ゲイル（ゲイル＝シュタットフェルド＝ファイン＝リースフェル）

年齢 17歳

性別 男

身長 170

国王の息子

魔術の腕前は学園上位

主人公属性すぎて作者が忘れなければきっとまた出できます  
詳細は不明

一言口メント

「国王と似てる？ 吐き気がする」

シャルティア＝ローレライ

年齢 18歳

性別 女

身長 165

自称迷探偵

魔術の腕前は学園一位の実力者

学園外でもその腕前は上位

嘘を真実と偽る詐欺の才能も世界トップクラス

一言コメント

「ボクに任せておけば、全ての事実は迷宮入りぞ」

国王 男

ジジイ

白髪

以下詳細は不明（明かされる事も無いと思います）

フイン

性別 男

アイリスのちょっと気になるお相手らしさ  
ちょっと頼りない感じでも、男らしいところがあるとかないとか

（爆ぜればいいのに……）

王立魔術学園

名門中の名門

卒業生はエリート街道

神

この世界の神とは別に、主人公の頭の中にだけ存在する。  
力が欲しいか？ と言う問を投げかけては来るが、実際に『えられ  
る事は皆無  
ハツキリ言つて役に立たない。

神子

主人公の頭の中に居る神とは別の神を信仰している教会に祭り上げられた生贊

詳細は不明（物語に関係してくるかも不明）

聖女

名前は出したけど扱いに困るビックネーム  
詳細は不明（勢いで出したものの不明）

無銘流

戦国時代から続いているといわれている

領主を失い落ちぶれた武芸者が集まつて出来た流派  
名前の由来は、どんな武器でも扱つていたことから、鍛冶屋の馱作  
でさえも扱うのでは？ と言う噂が広がったのが始まり。

明治以降は外国の武器、武術なども取り込み、海外にも分家がある。  
本家の影響力は皆無ではあるが、分家には政界にもコネがあつたり  
する。

古語

帝国が使つてゐるらしい魔術言語

魔語

王国が主に使用している魔術言語

神語

教会が使っているらしい魔術言語  
(教会が出てくるのは早くても第三部)

精靈語

精靈が使っているらしい魔術言語  
(精靈が出てくるかは不明)

竜語

竜が使っている魔術言語  
(物語に竜を出せるかは不明)

ポテチ

某有名メーカーのポテチ

味はのり塩

コの方か力の方かは想像に任せます

コーラ

某有名メーカーのコーラ

赤い方が青い方が聞かれれば  
作者は赤い方が好きです

## 第一部までの設定（荒）（後書き）

ネタバレ等あつたら指摘してください  
削除しますので、ええ  
たぶん含んでないとは思いますが  
感想とかはいつでも待っています

## 走馬灯のように飛んで行く

「はあ……ハア……ふ、は――」

感覚を澄ませる。

奴の気配は無い。

「ハアハアハアハア――」

「何時まで負け犬の様な呼吸を繰り返しているんですか旦那様?」

「ハアハア……ス――はあハアハアはあ――」

ダメそうだな。

『何処へ行つたのだ異界の者よ――正々堂々我と戦うのだ!』

遠くから叫び声が聞こえてくる。

地下都市の中を反射してくる声の元を辿る事は不可能に近いだろ  
う。

「まじまじ、呼ばれていますよ旦那様」

「僕は……生れも。育ちも。セントリアだよ……。イカイという都市も、村も 記憶には無い……。筈だよ」

まあ、呼ばれているのは、たぶん私だから当たり前か。

「せ、そろそろ行きますよ旦那様」

「そりそり……許してくれない?」

「何を仰っているのか理解できかねます、旦那様」

「だから、その……」

「そうですね」

俯いていた顔が、希望に満ちた顔になる。

しかし

「偶然ですよね。勇者の墓を荒らす事になつたのも、その勇者が私達を襲つたのも、たとえその勇者を起こしたのが『旦那様』であつたとしても 今のこの状況は偶然ですよね。分かっていますよ、

『旦那様』?」

私の言葉の数々によつて、希望に満ちた顔は段々と下げられ、ついには地面に到達する一歩手前状態。

私から見ると土下座に見える。

「どうでもいい事は置いてつけてや。走りますよ」

走りだし、周囲を確認。

幸い、勇者は追いついて来る気配も無い。

やつ、勇者である。

私達を追つてきている。

私個人を追つてきている。

勇者。もつと言つなら初代勇者。

初代勇者　VS　奴隸少女

どうしてこうなった……

ハツキリ言つて比べるまでも無い勝敗。

今、手を引つ張つて連れて走つてゐる役立……もとい、足手、じやなくて、旦那様を捨てて行つたとしても、勿体ないので囮に使うとしても、勝てる見込みは1割以下だらう。

それ以前に、奴隸の刻印があるので、旦那様が死ねばきっと私も死ぬ……

「この変態御主人！！」

「僕は何で罵倒されたのか、詳しく説明を要求する！」

意外と余裕あるな……本当に捨てて行こうかと、ちょっと邪な思考が割つて入

ゴバアツツ！……！……！

突然、前方に見えていた曲がり角で、派手な音と、砂煙が上がる。

『おお、此処に居たのか、異界の者よ

砂煙を振り払いながら現れる勇者。

此處で勇者に割つて入られても困ります。

これは、遺書でも書いとけば良か

反射的に身を逸らす。

ヒュッ

ドンッ

耳元を通過して行つたと思われる『何か』は遙か後方。

暗くて確認できない様な場所で音を立てる。

冷たい汗が首筋を伝づ。

『ふむ、やはり久しぶりだと感覚が鈍っている様だ。手加減出来ぬ  
かもしけぬが許せ』

いやいやいや、手加減とかされても死にます。

私はただの奴隸少女ですから！

「サ 「さようなら、良い人生だった」って諦めるの早い

「

ズンツ

「ぐ ツツ」

咄嗟に飛んで威力を軽減させたが、相当なダメージ。

景色が随分早く前に向かつて飛んで行く。

いや、私が後ろに向かつて飛んでいるだけか。

まるで走馬灯のよ

「ツツツガハ」

痛みと衝撃に顔を歪める。

結構な距離を飛ばされたらしい。

随分飛んでいた気がする。

意識が朦朧もうのうとして、家族の事が浮かんでは消えていく。

妹、兄、義父、義母、親戚の人たち。

此方の世界に来てからの事。

アイリス、ロープの変態ゲイル、魔王、城下町の人た

まつて、待つて、ウェイト、ストップ！

これ本物の走馬灯だよね！「冗談じゃなく、絶対そうだよねー！」

走馬灯留まる事を知らず、遂には此処に来る前、売られた所へと  
辿り着いて

「戦闘に自信のある者は一歩前に出る。」

ゲイルの言葉に一歩前に出る。

今は個人売買の真っ最中。

嘘付くとまたあの不快感が襲ってくるので嘘は付けない。

試したからちょっと気持ち悪い。

「コレで良いか？」

私を指刺しつつ、隣に居る貴族に聞くゲイル。

あれ？

周囲を確認すると、私だけ一歩だけ前に出た状態。

こんなのは、絶対おかしいよ！

「君が戦闘？ ゲイルさん、疑っている訳じゃないんだが

」

ま、見た目1歳に見えるらしい私の容姿だと、戦闘（笑）です  
よね。

「あれでも俺の近衛騎士5人を簡単に倒したぞ。まあ、こっちも油  
断していた所はあると思うがな」

え？ 近衛騎士？

そんなの倒した覚え ああ！！！あの山賊風の人たちか。

アレで近衛って…………もうちょっと人選ぼつよ、変態貴族。

商談が進む中、半分以下に減った奴隸たちに目を向ける。

今は祭の四日目、今日も快晴。

天気予言は一田田も、二田田も当たつてた。

これで夕方から雨が降り始めれば信じてもいいかも知れない。

ゲイルの言っていた事は本当らしく、あれよあれよと奴隸は売  
て行くのだが、私はまだ売れていない。

やはり礼儀が一番重要視されるらしく、家事全般はできる物を他  
に雇えば良いだけなので、今年は売れないと思う。

「料理は

「

「ローマンなり

「

売れるのはあまり嬉しいのだが、売れ残つていぬといつのもなんか納得いかないといつか、寂しいといつか。

複雑な感じですよ、ええ。

「こへりなり

「出来れば

予言が当たつているのなら戦争に巻き込まれるのは確定。

迷探偵を信用して良いモノかどうか……

「おこー ムリサメ、じつに来て

「あ、はー」

呼び声に上の空で答へ、ゲイルの元へと歩いて行く。

「これから契約権の譲渡を行なう。少し痛みが走るが我慢しろ

え？

左手の甲の刻印が光り出す。

わあ、何か綺れ つて痛つ！！

刺す様な痛みの後、刻印は元に戻る。

ああ、やっぱり消えるとかそんな訳ないですよね、分かってましたよ。

つて言つたか私売れたの？

## 変態一步手前

「今日からサイモンさんがお前の契約主になる。血口紹介しどけ」

「サヤ＝ムラサメです。よろしくお願ひします」

部屋へと移動して細かい契約内容確認中です。

新しい契約主は、見た目優男。

金髪金眼、イケメン、態度つて言つが、雰囲気が軽い。

身長も高めで……死ねばいいのに。

「僕はサイモン＝バッティーカ、これからよろしく」

別に貴方の名前なんて聞いてないです。

「どうせこの人も旦那様とかご主人さまって呼ばれて悦ぶ  
とい、喜ぶ人種だろう。」

も

人はそれを変態と呼ぶらしいよ。

あ～、テンション上がるね～。

まあ、自分が売られているのに、テンション上がるってのもおかしな話だけど。

「では今日の夕方には

「ええ、時間もギリギリで

氣分はドナドナ。

歌は知らないけど意味は知ってる。

子猫が売られていく話だよね！

別に自分の事を子猫ちゃんって呼んで貰いたい訳じゃないよ。

本当だからな！

大体子猫ちゃんとか、年齢的に無理があるって言つか、ああ、でもひつちだとちょっとだけ若く勘違いされて

「盗賊には氣を付け

」

「その為に　　」

あ、何か今フラグが立つた気がする。

話を聞いてなかつたけど……

「では旅の支度もありますので、これで失礼をせて頂きます」

「またのじ利用、お待ちしておりますよ」

「はは、そこまで奴隸は必要としてないが、何があつたらよろしく  
頼みます」

話し合こと言ひ合ひの雑談が終わつたといふと二人が腰をあげる。

「ムラサメ、旅の準備を手伝ってくれるかい？」

「ええ、じ主をまの命令とあらば」

「…………」

え、何その微妙な表情。

なんか悦んでいるけど、素直に喜べないみたいだ。

「えーっと……僕の事はサイモンかバックティークって呼んでくれればいいよ。家に付けば妻と子どもが居るから、名前で呼んでくれた方がいい」

なんだ、ご主人さまはダメか、そうですか。

いきなり名前はハードル高いな。

「はい、サイモン様」

「……様もいらない。出来れば呼び捨てで、もししくは『さん』付けで、僕が変な趣味に田覚めそつだ」

変態だと思つてたけど、実は変態一歩手前つてアレですね。

でも奥さんと子供さんか。

仲良くなれと良いな。

ちょっとだけテンションを上げつつ。

回れないと思つていた祭りの街並みを楽しみながら。

旅支度を手伝つた。

途中。

自ら売られていく準備をしていくようついでトランシジョンが下がったのは言つまでも無い。

## 変態一步手前（後書き）

設定集もアップしました  
読んでも意味はありませんが  
読んでくれると嬉しいかと思います

## チェックイン

雨だ。

日が傾くにつれて天気が悪くなつてきていたのだが、ついに振つて来た。

これで天気予言は多分信じて良い。

問題は

今、馬車で移送中つて事だよ。

何を？ 私を。

旅の準備が出来るなり、すぐに出発すると告げられる。

他にもサイモンさんと同じ方向へ向かう人たちと会流し、今は結構な人数での移動になつてている。

え？

それより迷探偵の事？

戦争の事？

まあ、その内なんとかなるでしょ。

考えても仕方ない、気楽に行こう。

「サヤー！ いつか手伝ってくれ！」

「はーー。」

振って来た雨は酷く、幌に穴が開いていたりすると、中の商品が傷んでしまう原因にもなるので、そのチェックと補修を行っている。

地面が泥濘始めてるので、馬車も速度は出さず、少し先の雨避けが在る処まで走って今日は休むらしい。

手先はそれなりに器用である私にとって、布を当てて縫う程度の補修は朝飯前なんだぜ。

「終わりました！」

「よし、今はこれで良いだらつ。幌の中に戻つて休んでくれ

とつあえずサイモンさんの荷馬車を探す。

「おーい、ムラサメさん、いらっしゃだ！」

声のした方を向くと、サイモンさんが手を振つて呼んでいる。

駆け寄り、幌の中にチョックイン。

気分は奴隸にチョックイン。

「大体終わったのかい？」

「ええ、終わりましたから」」うちを向かないでくださいね、サイモンさん」

現在着てているのはメイド服でもスウェットでも無く、私服である。サイモンさんが気を利かせてくれたのか、それともメイド服が気に入らなかつたのかは判断が難しい所ではあるけれど、買つて貰いましたよ。

この世界の標準装備。

ワンピーススタイルで、ちょっと眺め もとい、膝下まである  
長めのスカート。

上は羽織る様にチェックのカーディガンっぽい物を。

合計3セット。

買って貰つたばかりのその服が濡れた所為で所々透けて、下着（特にブラ）や肌が見えてしまっている。

「え？ どうし ？」

「振り返るな変態御主人！」

流石変態。

隙あらばラッキースケベを狙いつつ、女性の艶姿を見ようとする。

なんとか幌の除き穴を塞ぎサイモンさんの視界を遮る事に成功。

「そろそろ目的地ですよ。前を見て安全運転をお願いしますね」

出来ればご主人さまには豚箱にチェックインしてもらいたい。

## 急には止まれない

雨以外は何事も無く旅は進み、目的地はまつ田と鼻の先。

後半田も行けば

「やつ言えば、サイモンさんの家つじどうあるんですか？」

「あれ？ 言つて無かつたつけ。セントリア貿易都市の住宅街を」

セントリア貿易都市か、食材には事欠かないとありがたい。

「どんな街なんですか？」

「うへん……どんな街か、まず賑やか、次に雑多つてどうかな」

「いつもは気にしないから、よく分からないやと笑顔で応えるサイモンさんに、楽しそうな街なんだな」と何となく思つ。

出身地の事なんて、住んでる人よりも他所の人の方が詳しかったりするし、私だって日本の事を聞かれても上手く答えられる自信がない。

着いてからのお楽しみつて事で、まずは奥さんと子供さんと仲良くならなければ！

「盗賊だ！」

声自体は後方から、そして、それを聞いた全員の行動は早かつた。

「用心棒の冒険者は後方に回れ！ 他は全速力で逃げるぞーー！」

「」のキャラバンのリーダー的な存在の商人が命令を出し、それを聞く前に馬車の操縦者は馬へ鞭を入れている。

「サイモンさん」「

「大丈夫だよ、」の時の為に冒険者だって雇つてるんだから

「ああ、いえ、その事は心配してないんですけどね。

ああ、サイモンさんも他に漏れず、馬に鞭入れて走りだしちゃつてるし。

馬車は加速しながら、前を行く馬車について行く。

たぶん

「つ うわあーーー。」

馬車は急には止まれない。

前の馬車の後ろ、ギリギリで急停車。

まあ、戦術でも、戦略ともいえない様な策だよね。

後ろで声を上げさせる。

たぶん結構な人数で攻めて来たんだろう。

前で待ち伏せる。

此処は森の中の一本道だし、先回りするのも、この辺りを把握していれば難しくは無いだろう。

面倒な事になつたなあ。

## 空気が固まつた

「全員馬車から降りろー。」

「ぐずぐずするなー、殺されてものがーーー！」

「金田のモノは馬車に置いて行けよーーー！」

盗賊さん達、やりたい放題ですね。

私もあんな風に、自由に生きたい。

『人質を助けましょー。』

(キミは天使かい？ 久しふりだね)

『げへへへ、そんな事より、この隙に逃げちまおうぜ』

(悪魔め、そんな誘惑には負けないからな)

『そつです。逃げたとしても奴隸の刻印があつて遠くまで行けませんからー。』

(あれ？ 天使さんそれフォローになつてないですよ)

「全員集まつたか！？」

「まだ」」うちに居るぞ！」

「ソレちに連れて來い！」

盗賊による蹂躪は終わる気配も無い。

たぶん最後は皆殺しつてオチじやないだろ？

『もう面倒だ、全員殺しちまえばいいじやねえか』

（悪魔らしい意見だな、一考に値する）

『ダメです！ そんな事は悪魔が許しても天使が許しません！』

（ほひ、それならもつと良い意見でも言つて貰おうか天使）

『そうですね、天使に良い考えがあります！』

『どうせ、大した意見じや』

『盗賊のボスを人質に取つて逃げましょー！』

（それだ！）

『お前、悪魔より悪魔らしい素晴らしい意見だぜ』

『ふふふ、天使をもつと崇めなさい、奉りなさい』

脳内会議での結論は出た。

後は行動に移すだけ。

サイモンさんは運よく近くに居る。

盗賊は見えているだけで6人

ボスはあの厳つい奴だろう。

「ま、まと命令や出したり、報告を聞いているから重要人物なのは間違いない。

盗賊はロープを出して来て、端から縛り始めている。

「サイモンさん、金図を出したら馬車に逃げ込んでください」

「え……？」

戸惑いの声。

サイモンさんが理解したかは確認できないが、時間が無い。

盗賊が近くによつて来る。

「キャ—タスケテ パシ—ジンサマ—！—！」

大声を出しながらサイモンさんの後ろに隠れるように移動する。

空気が、固まつた気がした。

『『ダメだコイツ』』

# うるさいぞ、天使と悪魔！

私は普通の奴隸です

「おい！ ふざけへんの

」

「馬鹿へ」

サイモンさんに合図を出し、近寄ってきた盗賊の一人の喉を潰す。

「 つー！」

盗賊が持っていた剣を奪い、ボスの方へと猛ダッシュ。

「のまま盗賊殲滅とか、多勢に無勢は無理。

狙うは敵将ただ一人！

「 そいつを殺せつー！」

ボスが大声で怒鳴りつけるが、間に合ひそうなのは一人くらい。

部下が剣を構えているが、走った勢いを殺さず、ボスの前に立ちはかる部下の腹部へ剣を突き立てる。

剣を抜いている暇は無い。

抜くのにも時間がかかるし、剣自体も結構な粗悪品っぽいので、刃毀れしているだろう。

その部下が持っていた剣を拝借。

ボスが剣を構えるが、遅すぎる。

構えようとした右手の手首を掴みそのまま捻りあげ、背後から首筋に剣を突き付ける。

「全員動くな！！」

私の声に、その場の全員が止まる。

いやいや、サイモンさん達は動いていいのに、なぜ止った。

つていうか馬車に逃げ込めて言つといたのに、縛られた人の口一甫解こうとしてますよ。

正義感あふれる良い人ですね。

『誰かさんと違つてな

（黙れ、皆殺しにしようとした悪魔に言われたくないよ）

『まつたく、これではどうりが悪役か分かりません』

（お前の案を採用したんだよ、天使…）

「動かないでください。手元が狂いますから」

ボスが落とした剣を何とか拾おうと吼擣しているので、それを躊躇める。

「貴方がこの盗賊団のボスですよね？」

「だつたらどうした、てめえは騎士団だとでも名乗るのか？」

「いえいえ、私は普通の奴隸です。かよわい乙女ですよ」

あ、何だらう。

自分で言つてといてなんだけど、鳥肌が立つた。

「部下達に指示して下さい。私達が逃げられれば、貴方を解放しますから」

「そんなこ　　つーーー」

首筋に当っていた剣を少しだけ、薄皮だけ切れるように動かす。

「早くしないと、体と首がわからなくなっちゃいますから」

「お、おこ、てめえらー、逃がしてやれー！」

「サイモンさん達はわざと逃げる準備してたねー。何時まで固まつてこる気ですか」

まだ固まつてこむサイモンさん達一同に対し、わざわざ動くよう命令。

「バカなの？ 死にたいの？ 私は美味しい物が食べたいよー！」

盗賊たちにも紐を解くのを手伝わせ、馬車に全員乗り込んだところで、縛りつけたボスの塊と、私が馬車へと乗り込む。

「ある程度の距離を行った時点で、お頭さん解放しますから」

回収を願いしますね。と言いつつ同時に馬車が走りだす。

## 私は普通の奴隸です（後書き）

評価してくださった方  
ありがとうございます。

感想とか指摘とか  
いつでも受付中です

悪魔よつも悪魔ひじく（前書き）

ちよつとグロ？ 入ります

## 悪魔よつも悪魔ひじく

疲れた。

なんとかなつて助かつたよ。

わい、「ハイシをひつするか。

サイモンさんに聞いてみるのが一番だな。

「サイモンさん」

「え？ なんだい！？」

若干声が上擦つてゐるのは氣のせいだらうか？ 気のせいだと思つておひづ。

「ハイシひします？」

指を刺した先には肉の もとい、盗賊のお頭の縛り。

「じつあるひて、解放するんじやないのかい？」

「え？」

「え？」

…………。

「…………」

「ああ！ そんな事も言いましたね、私」

「やいや、すっかり忘れてましたよ。

やう言えば、そんな約束もしましたね。

「君は一体どうするつもりだったんだ……」

「普通に騎士団みたいなところに突き出すとか、このまま首を刎ねて捨てて行くとかですね 」

「可愛く言つても言つて居る事が物騒過ぎるー。」

『「マイツの方がよっぽど悪魔だった…………』

『「天使もまだまだ修行が足りませんでした…………』

(悪魔で結構、命は一つ。天使は何の修行をする気だ)

「約束通り解放してあげてくれ。盜賊連中これ以上怨まれたくないからな」

もう十分怨まれていい気がします。

セトビツシヨウ。

命令だし、逃がすのは仕方無い。

そうだ！

取り出したるは先程の剣。

突き刺し刺さる、盜賊の足。

「あぎゅ ああああああああああああああああああああああああああ

叫び声をあげるが関係ない。

両手両足に穴をあけて馬車の荷台から蹴り落とす。

動脈とかは傷つけないよ<sup>う</sup>じたから出血多量で死ぬ事は無いだ  
う。

『コイツ悪魔だ！！』

「マ、マジかダメだん。」「へりなんでも、やつす

「」れで、一度と悪さは出来ませんね、ご主人さま！」

何か言いたそうだったサイモンさんを笑顔の返答でやり込む。

何か叫び声が聞こえる。

## 何この心靈現象、恐い。

その後は何事も無くセントリアに着きましたよ。

盗賊に襲われた事によつて、冒険者が数名、商人が1名行方不明なつてゐるが、たぶん死んでゐるだらうと、捜索隊は結成されなかつた。



悪魔よいつも悪魔ひじく（後書き）

感想 指摘 待っています

お役所から解放されたのが夕方頃。

荷物への被害や事情聴取、怪我人の救護なんかで時間を取られてしまった。

「いやー、やっと解放されましたねサイモンさん」

お役所仕事は何處いせかいでも変わらず、遅くて仕方が無い。

退屈だつだつた、暇ひだつた、眠ねい。

「ここの辺りだと盗賊も居づらくて住み着かなかつたんだが、何かあつたんだろうか?」

「へえー、ここの辺つて平和なんですね」

「ああ、このセントリア貿易都市には東西南北の商人や旅人、その人達が雇う傭兵や冒険者が多く集まるんだよ。下手に馬車を襲えれば傭兵しか載つていませんでしたって事になりかねないからね」

それは悲惨すぎる。

「今日は私が乗っていたから良かつたものの、いや、悪かつたのかな？」

「一先ず僕の家に向かおひへ、ハニアとサラが待つてゐる筈だからね」

「ハニアさんがサイモンさんの奥さんで、サラがお子さん。

大丈夫、私なら仲良くなれる。

家の前に着く、やばい、緊張して来たよびつすたらいいーーー？

何か日本語呴しこ氣がするナビアすたらいいーーー？

サイモンさんはチャイムを押して

「今帰つたぞー！」

普通にドアを開けようとドアにぶつかった。

間抜けすぎませんか。

「お、おかしいな？ 何時もならドアが開いて

」

「どなたさまですか！？」

家中から声が聞こえる。

お子さんだらうか？

「サラ！ パパだよ、サイモンパパが今帰つたぞ！」

やはつお子さんらしいが、パパつて、サイモンパパつて……ダメだ、笑つちゃいけない。

「今お母様が出かけているので、帰つていただけますか？」

「だからパパが帰つて來たんだ。せめて扉を開けてお話しよつ！」

「誰も家に入れるなとお母様に言わっていますので、オレオレ詐欺とかやめていただけますか？」

なんだろ？

現代の嫌われているお父さんの凶が此処に在るよ……

つて言つかかるにもあるのか、オレオレ詐欺。

「 あら、サイモン。お帰りなさい」

振り向くと、偉い美人がそこには居ましたよ。

美人、短い青髪、金眼。

まるで物語の中の人魚の様な姿に目を奪われる。

「 ただいま、ラニア」

「 ラニアさん！？」

まで、この美女がラニアさん…？ いえ、もうラニア様と呼ばせて下さい。

「 今回はまた、長い出張でしたね」

「 それより大変なんだよ。サラが反抗期に入ったのかお父さんの言う事を聞いてくれないんだ」

「 あらあら、そんなのはいつもの事でしょう？」

「 待ってくれ、その認識はおかしくないか！？」

「せりせり、じぶの可愛こお嬢わんをわたしに紹介して下せーな

「ああ、今日から雇つ事になつた

「わたしはアリトと書こます。こんな所で立ち話も何ですか、どうぞ中に入つて下せー」

「はじめまして、サヤ＝ムラサメです」

マイペースな奥さんだ。

中からドアを開けてもらひ、中へと招き入れる姿は優雅なんだけ  
ど、なんだろう、入つたら一度と出れない様な気がする。

「待つてくれ！　僕の話は無視な

「何も無い家ですけど、やつくりしてこつて下せーな

後ろ手にドアを閉めるアリト様。

その手が素早く鍵を閉めたのはやつと氣のせい、そう、私の勘違  
いだと思いたい。

「待つて！　僕も中に

」

デンドンドン

「今お茶を入れますね。サラ、戸締りは任せるわ」

「はい！お母様」

元気の良いいお返事ですね。

## オレオレ詐欺（後書き）

「ミニアさんがボケてくれる  
話の進みがエライ早く助かります

「改めて血口紹介しましょうか」

なんとか家に入れてもらえたサイモンさんも交えて食卓を囲む私達。

ちなみに、サイモンさんが家に入れてもらえたのはつい先ほど、食事の準備が整つてからである。

「わたしはラミア＝バッティーグ。専業主婦で、趣味は料理。一応、サイモンの妻でもあります」

「一応つて……」

サイモンさんが頃垂れているのは無視。

「サラ＝バックティークです。15歳ですので、来年から魔術学院に入学の予定です」

出来たお子さんだ。

容姿はハリーアさんに似ているのだが、中身はサイモンさんには似

ても似つかないしっかりとしたモノだ。

「どういう化学変化が起って、この子が生まれたのかとても気になる所だけだ。

「私はサヤ＝ムラサメです。奴隸としてサイモンさんに買われてやつてきました。これからよろしくお願ひします。田那様、奥様、お嬢様」

深く頭を下げながら血口紹介。

「これからお世話になるのだ、これくらいは普通だと想つ。

「あらあら、そんな悪まらないでいいのよ。わたし達の事は家族だと思つてくれれば嬉しいわ」

「わうだよサヤ、これから僕たちは家族だ」

家族……

家族か。

私はそもそも普通の家族つて言つのが分からんんだけどね。

「サヤけやん」

「は、はー」

「自分の事を『奴隸』なんて言ひかけやダメよ」

おつとつした表情でも、しつかうとした口調で諭す言葉。

「やうね、わたしの呼び方モリニアで良いやよ」

「あ、ワタシの」ともサラりと呼んでくれた。

「僕の事はサイモン様と

」

「分かりました、『リリヤ姫、サリヤ姫、田那様』

「あれ!? やうして僕だけ

」

「本当は敬語も使わなくていいのだけれど、それは追々直して行く  
といこわ

「僕が悪かった! だからサイモンさんって呼んで

」

「さあ! 冷めてしまわない内に食事にしました。今日は腕によ  
りをかけたのよ」

暖かい。

本当に暖かい家庭。

異世界に来て、奴隸になつて。

それでもこの暖かさがあれば此処に来た意味はあつたと思えるくらいに暖かい。

自分の居場所は此処じゃないとハツキリ思えるくらいに、自分が酷く場違いな気がして仕方ない。

それを顔には出さず、楽しい振りをして食事をする、談笑に混ざる。

今日は早く寝てしまおう。

それが良い。

嫌な事は忘れて、清聴を會おうじゃないか！

遂に総合評価100ポイントです  
最初の目標だつた3桁です

今の時点で3桁は早いのか遅いのか、判断しかねますが3桁です  
PV3万 ユニーク5千 嬉しい限りですね。  
これからも頑張つて行こうつて思えますよ

感想とか指摘とか待つてます

## 夢の中へ

クソ、寝付けない……

眠いはずだ。

体は疲れているし、心も疲労感で一杯なのに、意識は高ぶつて仕  
方ない。

今日感じた肉の感触。

久しぶり過ぎて新鮮に感じたせいだらうか。

肉を抉つて行く剣先。

骨を断つ時の抵抗。

命を奪つたと確信できる感触。

「…………」

無理やり眼を閉じ、夢の中へと落ちて行く。

無理に寝ると絶対に悪夢を見ると言つ確信はあったが、それでも

起きているよりはずつと良こと、その時は思った。

田の前に死体がある。

誰のだろう？

今日殺した盗賊に見える。

顔が苦痛に歪んでいるのが分かるが、どうしようもない。

もう死んでいるのだから、苦痛を和らげる事も出来ない。

死体が増える。

たぶん、この世界に来てから初めて殺した近衛兵。

また増える。

名前も知らない誰か。

突然、私を襲ってきた誰か。

同じ修練を積んでいた同族。

人生で初めて殺した、浅木祐樹。

そして

実の父親。

今更だ。

罪悪感も嫌悪感も浮かばない。

「本当に？」

屍の上に座り込む、誰かの声に応える様に呟く。

「殺した相手に何を思えばいいのか、分からんんだよ

「最初に人を殺した時も、そう思つた？」

「何も思わなかつた」

「実の父親を殺した時も？」

「何も、思わなかつたよ」

そうだ。

幼馴染で、お節介で、私の事が好きだつた癖に、隠そつとしていた祐樹。

あれだけ親しくしていても、結局は何も思わなかつた。

実の父親、アレはアレで嫌悪感しかもつていなかつたけど。

肉親を殺した時でさえ、何も思わなかつた。

ああ、結局私も久我家の一員なんだなつて、実感しただけ。

だから、覚悟を決めた。

殺した相手も自分も納得できるような覚悟を

「

「

## 地味にダメージでかい

「朝ですよー。」

「…………」

太陽の光と、大きな声で強制的に意識が覚醒する。

悪夢を見て居た様な気がするが、幸か不幸か内容は覚えていない。

なんだろ、不快感はあるのに原因が分からなって、いや、原因は悪夢のせいなんだろけど。

「朝」はなん出来るよ。サヤお姉ちゃん

お…………お姉ちゃん!?

年齢的にはそこまで離れてないし、そもそも童顔の所為で同じ年くらいに見えるのに!

純真無垢な口づき……もとい、お子様からお姉ちゃん!…

やっぱ、鼻血でかい。

「どうしたの？」

私がからでる黒いオーラを敏感に察知したのか、少しだけ後ずさる  
サラリヤン。

地味にダメージがでかい。

サイモンさんの気持ちが少しだけ、分かつた気がした。

買って貰つた私服に着替えてリビングに向かうと、既に食事の準備はされており、サイモンさんとラニアさんが待つていた。

そのテーブルにサラが向かい、私は開いている席へと向かう。

「おはよー、了起来ます」

「おはよー、サラ」

「サヤちやん、おはよー」

「や、朝」はんが冷めない内に食べよひじゃないか

田玉焼き（何の卵かは知らないが）とトースト、サラダ、牛乳（の様な物）と、普通の朝食。

「サヤは昨日から家族になつた訳だが、働く者食つべかりずと言つて」

「サヤちゃんにはお手伝いをして貰います」

サイモンさんの語りを無視してラニアさんが提案する。

働く者食つべからずつて諺ひつちにもあるのかつて驚愕は、頭の隅つこに置いておく。

あれ、格言だっけ？

「掃除洗濯、主に炊事関係ね」

「それなら大丈夫です」

家事なら大丈夫。

これでも一人暮らし歴は2年！

あ、でも高い物とか異世界のモノだと扱い違うのかな？

それ以前に洗濯板で洗濯が基本の世界で家事とかどうするんだ？

「今日は、使いに行つて貰いましょう

「サイモンさんも一緒にですか？」

「え、何でだい？」

「いえ、刻印があるので契約主から離れられないんですよ、私」

思い出したように設定を持ち出す。

うん、私も今の今まで忘れてたんだけどね。

「ああ、それなら大丈夫、このセントリア貿易都市内なら自由に動き回れるようになつてゐるから」

都市の外に出る場合は僕が同行しないと駄目だけどねって、この  
刻印の設定つて結構な融通が利くっぽいな。

これがご都合主義つて奴か！

そもそも、ご都合主義なら奴隸になんぞなつとらんのだがな

「はい、これが貿易都市内で使われてるセント硬貨」

見せてもらつた初めての硬貨。

ハツキリ言って、違いが分からぬ。

金貨、銀貨、銅貨は分かるのだが、もう2枚は何だらうか？

「高い順に、白金貨、金貨、銀貨、銅貨、鉄貨」

白金？

もしかして、プラチナ？

まあ何でもいいや。

貨幣価値は鉄貨10枚で銅貨1枚。

銅貨10枚で銀貨1枚。

銀貨100枚で金貨1枚。

金貨100枚で白金1枚。

結構分かりやすい上に、銅貨1枚が100円くらいの価値っぽい。

それを考えると1金貨が10万円、1白金貨が……考えるのはやめよ、どうせ私には縁がないものだし。

まあ、後は実践だけ、サラちゃんも一緒に歩いてくれるらしいの

で問題なく任務は達成できたりします。

地味にダメージでかい（後書き）

久しぶりにこのノリです  
真面目な話は肩凝つて仕方ないですね  
次回からはしばらくこんなノリが続く

はず、  
……

感想とか指摘とか待つてます

街に出るといろんな人がいる。

お使い気分で出たはいいけど、眼が回りそうなほど人が多い。

王都では祭りの時期だからこそアレだけの人がいたんだろうけれど。

此処は平日、何も無い状態でこれらしい。

それに、王都では人種に統一性があったのだが、ここはもっと雑多とした感じだ。

背が異様に高い男性、3メートルくらいあると思つ。

首が痛い。

髪がピンク色の女性、眼が眩む。

眼とか以上に心が痛い。

肌が黒い人。

本当に真っ黒、インド人もびっくりの黒さ。

「つてもちつちやい人、50センチくらい。

それと、猫耳。

.....

猫耳！？

良く見渡せば猫耳以外にも犬耳とかキツネ耳とか。

それ以前に一足歩行で歩く猫とか犬がいるし！

これこそファンシー、もとい、ファンタジーってもんですね。

「サヤお姉ちゃん、買い物は何を頼まれたんですか

「うーん？ えっと、ちょっと待つてね」

カラちゃんに聞かれて、ポケットにしまつておいたメモ帳を取り出しその確認しながら読み上げる。

「ベリとフロー、ラキ、胡椒、コラシト、グルの肉、これだけだよ

「やつましたね、今日はカレーですよー」

待ってくれ。

せつしきの食材でどうしてカレーが出てくるのか私には理解できません。

あれか？ 私は人参ジャガイモタマネギお肉と列挙してたとでも言つのか？

胡椒は既に変換済みだったから良かつたものの、他の食材は私の脳内変換が全く働いていない。

まあ、その辺はなんとかなるか。

「まずはベリとかラキを買いに行きましょう。」  
「…」

「ハイハイ、今行きますから」

カレーが好きなのか、はしゃぐサラに追いつくため、少しばかり歩く速度を上げながら雑多な街を見まわしていく。

「この辺りは住宅街を抜けたばかりだというのに、土産物、簡易食材（駄菓子みたいなモノだろうか？）などなど、貿易都市の名に恥じないカオスぶりが發揮されていと言つていい。

「サヤお姉ちゃん！」

見るのと同じく、歩く速度が遅くなっていたらしい。

カラちゃんに急かされ、今度は小走りで向かう。

まあ、迷子になる事は無いだろう。

今日はカレーうどんでも私も腕によりをかけてお手伝いをしよう  
じゃないか！

追記。

カラちゃんとの買い物は楽しかった。

また行きたいです。

小学生の日記かー

サルでも分かる

サイモン家に来て早数週間。

それなりに生活に慣れ、食に改革をもたらした私はふと思い出して、書庫へと向かっている。

うん、忘れる所だったよ。

そう。

魔法である。

使えるなら使ってみたいもんだけどね。

やつぱり憧れ？

書庫の扉を開く前に中の気配を探る。

誰もいない様だ。

いやー、迷探偵さんが居たら如何してくれようかと思つてたけど、居なかつたか。

ドアを勢い良く開け放つ。

「たのも～！」

.....

うん、誰も居ないんだから当たり前だよね。

書庫の中はゲイルの家よりも雑多として居て、種類も豊富そうに見える。

何を隠そう、我が家の中のサイモンさん、現<sup>じ</sup>主人様は考古学者にして翻訳家を生業としているのです！

最初は趣味の考古学で難しい言語を翻訳なりなんなりしているうちに、多種多様な言語を習得していたとか何とか。

趣味と実益を両立したみたいですね。

そのサイモンさんが誇る巨大書庫。

人は其れを『世界のゴミ場庫』<sup>アカシックレコード</sup>と呼ぶ。

まあ、壮大に言つたけど、そう呼んでるのは私とサラちゃんくらいのモノなんだけどね。

実情はただ掃除してないだけの図書館である。

汚いけど、探せば大抵の知識は此処で手に入ると言つていい。

そう言えばどんな本探せばいいんだろ？

『初心者用魔法入門』とか、『鉄板！ 初級魔法100選』とか  
無いかな？

無いですよね、それで

その瞬間に止ついた。

『サルでも分かる！

魔法の使い方 ～入門編～』

何故……

まあ良いか。

取り合えず拾い上げてページを開く。

『序章 ～この本の在り方にについて～  
この本はサルでも分かるような簡単なものです。

まずは魔力を認識してみましょ。」

それさえ認識できない様な場合、貴方にこの本は必要ありません。  
早急に捨て去るか、病院に行く事をお勧めします。』

バカにされてる気がする。

いや待て、確実にバカにしているだろ！－

投げ捨ててやりたい気持ちを抑えつつ、これさえ読み終われば魔  
法が使えるという希望を一緒に捨て去る訳にはいかないとページを  
進める。

『第一章 ～魔力を感じよう～

まずは自分の中にある力を認識しましょう。  
胸に手を当てて、大きく深呼吸をしながら

』

なるほど、意外と中身はまともそうだな。

書いてある通りに行動しつつ、続きを読むで行く。

『深呼吸しても上手しない自分の胸の無さが実感できましたか？』

「やかましいわ！－」

思わず本を床に投げつける。

星になつた（前書き）

今日で一ヶ月？

投稿開始一ヶ月ですかね？

## 星になった

あ！ いけないいけない。

これは希望、魔法への第一歩。

なんとか自分を納得させることに成功。

一度念入りに踏みつけてから拾い上げる。

大丈夫、きっと大丈夫。

自分を説得させつつページをめくる。

『第二章 ～魔力の通り道を作りましょう』

魔力があつてもそれが通る道が無ければ魔力は意味がありません。  
血液があつても血管が無ければ意味がない様に』

おお、意外とまともな事が書いてある。

少しだけ期待度が上がる。

『魔力が何処に在るかは前章で把握している筈なので、  
そこから魔力の通り道を創つていきます』

前章？ そんなモノは無かつた。

『此処からは下腹部に焦点を置きます。

理由は多々ありますが、説明しやすく。

またここに魔力を貯め込む人が多い点が挙げられます』

ほづほづ、なるほど。

つて事は、私も下腹部に貯め込んでる可能性が高い訳だ。

なんとなく下腹部を摩りながら続きを読む。

『何より、エロイから下腹部に焦点を当てます』

知るか！！

いや待て、説明自体は良かつた。

最後の一文が余計だっただけで、そう、説明自体はまともだつたのだ。

『第三章 ～魔力を体外に放出しましょう～』

あれ？

第二章の通り道はどこいった？

『前章に関わつてくる問題ですが、魔力の道は限られています』

ほへ、分かりやすい。

流石サルでも分かる入門書。

『下腹部に魔力を貯め込んでいる場合、まずは前屈を行い、腰から利き手にかけて体を解して行きましょう』

準備体操のよつなものだらう。

適当に体を解して行く。

『この準備体操に意味はありませんが、第一章でこの本を投げ捨てて居ない胸の大きな人は、第三者の目から見ればエロさ満点、目の保養になること間違いなしです』

ぶちつ

何かが、キレた音がした。

『終章 ～免許』

この本を読んで居る貴方は既にご存じだと思いますが、魔法を使うには免許が必要となります。入門編以上の事をする場合、しっかりと免許を取得してから行いましょう。

それでは、初級編でまたお会いできる事を楽しみに待っています

本を閉じる。

深呼吸を行なう。

窓へと歩み寄り、そつと窓を開ける。

とつてもいい天氣だ。

「大事な事は、一番最初に

」

大きく振りかぶつて。

「書いたことをやめると何をやるかわからなくなってしまった。」

本を投げ飛ばす。

「アイツは、星になつたの？」

清々しい気持ちで、どこかへ飛んで行った本を見送る。

いやー、なんか変な夢見てた。

うん、何も無かった。

本探し。

さつと何かあるや。

その後探し出した本の数々を元に、蠟燭に火を付けるくらいの魔法が出来る様になった。

あはは。

才能無いな、私。

ま、一朝一夕で手に入る様な物なら学園とか存在して無いですよ。  
ね。

気長に勉強、努力、反復練習。

結局これが大事なんですよ。

星になつた（後書き）

PV4万

ユニーク6千

お気に入り登録して下さつた60名の皆様に感謝をこめて

ありがとうございます

今日は1ヶ月記念日

きっと何かいい事ある  
気がする。

枚数にすれば16枚

魔法の練習は日々欠かさず、本と睨めっこが続く毎日。遂にコップ一杯の水を発生させることに成功しました！

家事の合間に練習してるのであんまり時間も無いしね。

あ、免許？

バレない罪は罰を受けない。

これ世間の常識よ。

大きな家の家事をこなして行く事にも慣れて来たよ。

そして今日は絶好の布団干し日和。

「よし、今日は布団を干そう。」

「ワタシも手伝います」

サラちゃんとも随分仲良くなつた気がする。

「ハハア、さこのペースには未だに慣れないけど。

「サラちゃん、ありがとう。まずは布団を運び出つか

「はーー。」

家中の布団をロビーへとかき集めて行く。

とは言つても、使用している布団は4組。

お客様用や予備を含めても計8組。

枚数にすれば16枚。

数字で見ると意外と多い気がする……

ま、軽い羽毛布団（何の羽毛かは知らない）は2枚3枚といつきに運んでいけるので15分程で家中の布団を集める事に成功。

サラちゃんの手伝いもあって意外と速く済んだな。

集めた布団は庭に作つた簡易干し竿に掛けたり、梯子を使って屋根の上に運んで行く。

カラちゃんが屋根の上に上がったそとにしているが、屋根の上は危険なのでカラちゃんを上がらせる訳にはいかない。

落ちたら骨折じゃ済まないんだよ。

しかし、いい眺めだな。

庄内街と言つ事もあつてか、屋根の上からの見晴りはいい良い。

天気もいいし、お毎寝したいな。

『寝ひまえよ。布団だつてすぐ傍に在るじゃないか』  
（悪魔の囁き、でもカラちゃんも手伝ってくれてるの……）  
『ナラヒコと一緒に寝ればいいじゃないですか』  
（おつと、天使のキリは普通止める側じゃないのかい？）

『眠い、寝よ、布団ふかふか、天気最高』

（へへ……睡魔軍まで来るなんて）

「サヤお姉ちゃん、これが最後の布団だよ……」

トからナリヤの声が聞こえる。

『ナリヤンを呼べば一緒に叫んであげる』

『こりゃこりゃしながらお風呂…………最強じゃなことですかー』

『ネコツ、ネコツ、ネコツ』

（おひ、お前が一斉攻撃か、でもそんな誘惑に私は負けないんだー。）

「サヤお姉ちゃん？」

心配そうな声に、天使や悪魔、睡魔の誘惑を振り切つて応える。

「今そつちで  
あがつておこで  
行へるか、ひー。」

あれ？

「良いのー。」

「いやいや、良くない、良くないです。」

「私がそつちに行へからー！」

『勝敗は決した、諦めろよ

『幼女とお姫寝ですよ。もつと喜びまじめー。』

(幼女とお姫寝…………最高だなー。)

梯子を掛けた辺りに白い悪魔が！

まあ、布団を負ったサラちゃんなんだけれどね。

「わあ、本当にいい天気ですね」

上がって来ちゃったものは仕方無い。

「これは是非とも一緒にお昼寝しなければ！」

「良い天気だし、お昼寝しようつか！」

「いいですけど、眼が怪しげです」

「何を言つているんだい？ 私の眼はピコアピコアだよ」

つこでに体もピコアピコアですよ。

修学旅行で行つた某所の有名な占い師をさにいよれば、彼氏居ない歴は前世から続いていますが何か？

「オーラも怪しいです」

「何を言つているんだい？ 私のオーラはピンク色だよ

「言動も怪しいです」

『完全に変質者ですね』

（天使の癖に何言つてんの！？）

『完全に変態だな』

（悪魔は黙つてろよ！）

「ワ、ワタシ、もつ降りますね…………」

どうじよつ。

完全に警戒されてる。

幼女とお昼寝出来ないなんて、神は我を見放した！！

『力が、欲しいか？』

（力より知恵だつて何度言えば分かるんだよ、この役立たず神！）

『幼女を押し倒す力が、欲しいか？』

（ ！？）

『力が欲しければ、願え 』

（待て待て待て！ それ変質者とか変態以前に犯罪者の仲間入りだ  
る！？）

『性犯罪者の力を！』

（もう眠つてくれよ… 私の中で永遠に眠つてくれよ…）

煩惱を振り払つよに布団へダイブ！

ボフッ といつ良い音を立てながら見事な着布団に成功。

「ああ、気持ちいい～」

最初の方に干して置いた物にダイブしたので割と暖かい。

ああ、お田様の匂いって奴だね。

『豆知識。

お田様の匂いって言わてるアレ、実はノミとかダニの死骸の匂  
い。

あ、要らなかつた？

でも良い匂いだから私は気にしない。

「…………う」

おや、サラちゃんが仲間に入りたそうにこちらを見ている。

仲間にしますか？

› YES

はい

む、難しい選択だな。

人生でトップに入る選択だよ。

しかし、私の答えは既に出ている！

はE S ! !

「カラちゃんもこっちにおいで、気持ちいいよ～」

傍から見たら幽鬼の如く、私はサラちゃんを天国へと誘つ。

「…………うう～」

サラちゃんは悩んでいるよ'つだ。

「むうえいつ！」

意を決したように私の隣の布団へダイブ。

「わあ！ 本当にふかふかで  
すう」

即寢！？

何秒とかじやないよ。

これはび太くん以上の早さだつた気がする。

あれ！？

そう言えば、いやいや出来てない！

いちやいちやする前に寝るなんて、想定の範囲外だつた。

仕方ない、私も寝よう。

今日は本当に良い天氣だ。

## ピアノピア（後書き）

次からやつと物語が動きます  
動くはずです  
動かして見せます  
きっと 動いたら いいな

「の家に来てから一ヶ月。

「アさんやサラとも仲良くなつて、快適な奴隸生活満喫中です。

三食<sup>サボリ</sup>寝付きで月給銀貨5枚。

お小遣いとかじゃないです。

ええ、給料です。

断じて子供に渡すお小遣いじゃないんです！

あ、サラとは何時の間にか姉妹の様に仲良くなりました。

今では『サラちゃん』って呼ぶと反抗期のかちよつと怒られる  
んです。

無視されるんです。

お姉ちゃんちよつと悲しいです。

気を取り直して、そんなる口、我が家に訪問者が現れたのです。

「ただいま」

「どなた様でしょうか？」

「あ、すいません。間違えたみたいです」

イケメンだけど雰囲気が軽い残念な人が訪ねて来たと思ったたら、すぐに扉を閉めて帰つて行つた。

なんだつたんだ？

「待つてくれ、此処は僕の家だらうーー？」

「いえ、ここには奥様とお嬢様、それに使用人の私しか住んでいませんが？」

「旦那様！ 奥さんとお嬢さんがいたら旦那さんも居るはずだ！」

「え？」

「…………」

ん？ あれ？

「ああ！『』主人様じゃないですか！！」

「どうしてそつちに行つた！」

「いえ、ちゃんと名前も覚えていいますよ。軽い冗談じゃないですか、  
旦那様」

「僕の名前は？」

「えつと…………」

「…………」

そう、サから始まる四文字だった気がするんだ。

サ、サ、サ～。

サリ…………じゃない。

サイ ッ！！

「お帰りなさいませ、サイケンさん！」

「サイモンだ！ サイモン＝バックティーケーーー！」

一文字違い、惜しかつた。

「お密様でしたら密間にお通しついで下わこね」

家の奥から「ニニアさん」の声。

そうだな、こんな所で立ち話つてお客様に失礼だつた。

「では、密間にお通しあり

「僕はこの家の主人のはずだよな……」

流石に落ち込んでいる。

「やつ言えば最近見な」と思つていましたけど、長い散歩でしたね」「散歩に出て帰つて来られないほどボケてないし、もう少し僕の事も気してくれ」

「あ、客間はこちへになります。少々お待ちくだ

「仕事で出てただけだでこの仕打ちか、何を、間違つたんだろうな」

あ、いじめ過ぎたかな？

「そのオジサン、誰？」

ああつと！ ここでサラからの見事な右ストレートが決まった！！

「サヤ、知らない人を家に入れちゃ駄目だよ」

まさかの2コンボ！

その後、撃沈したサイモンさんを仕事部屋に運び込み、表に止めてあつた馬車から荷物を運び込み、ついでに食糧と水を運び込んで軟禁状態にしようとしたところで

「待つてくれ！」

待つたがかかる。

## 2 ハンボ（後書き）

あれ?  
そんなに動いて無い?  
そんなまさか  
あれ?  
あれ?

## 英語も無理です

「サヤは確かに帝国言語も話せるって聞いていたんだが

「ええ、まあ」

帝国言語じこいか、どんな言語でも理解は出来ます。

ただ自分では何喋つても、何を聞いても日本語に脳内変換される  
だけで。

「少し翻訳作業を手伝つてもうらえないか?」

「…………え?」

翻訳?

いや、出来ますよ。翻訳。

日本語オンリー（脳内変換仕様）で読む話すは出来ますけど、書くのは無理。

だつて私が書ける文字つて日本語だけで、あと少し英語も出来る

(かな?) つてとこる。

ペンとかイズとかディスとか

ディス イズ ペン (書くモノに軽蔑される)

はい、英語も無理です。

「めんなさい。

「そんなに面倒なモノじゃないよ。ただ今回依頼された翻訳が結構  
面倒でね」

その内容を事細かく説明されたけど、要点は3つ。

今まで発見された事のない文字らしい。

帝国の古代文字に似ているらしい。

ハッキリ言つて訳わかぬ。

それ見せてもらつた方が早いだろ? とか思つたり思わなかつたりだけど、今までに発見されていなかつた文字を、ただの奴隸が解読したとか信じてもらえないだろうから黙秘権行使します。

「資料集めと僕が分からぬ文字を読んで翻訳してもうつだけでいいから」「

「まあ、それくらいなら」

と、軽い気持ちでOKしたんだけど、資料探し面倒くさい。

探す場所はだた一つ

そう、『世界のアカシックレコード』場庫である。

いや、もう全部捨てりよつてくらい本が多過ぎてですね。

探すの大変なんですよ。

しかも所々翻訳間違えたり、イライラする。

ある程度の期間、耐えただけでも褒めて欲しい。

でも、この結果だけは避けられなかつた。

「サイモンさん、こここの翻訳間違つてます！ ここも、ひとつも、これも、あれも、それも

「ど、如何した　　」

「どうしたこうした出来ません！ 探しててる資料が一向に見つから  
ないと思つたら翻訳間違てるんですよ。見てても読んでてもイラ  
イラして仕方ないんですけど……！」

まあ、仕方ない。

翻訳の手伝いを始めて早2ヶ月。

翻訳機とか無いから原文睨めつゝ。

普通の辞書みたいなものも無いからメモしつつ、重要なところま  
たメモつての繰り返し。

私のイライラは遂に爆発した。

だつて翻訳間違てる資料探して来いつて言われても、のひないへんかん私の頭は  
正確な意味しか読み取れない。

王國言語で書かれた物を元に原文探す手伝いとかしてたんだけど、  
間違い探しで正解が分かつているのに間違いを探せつて言われてい  
る様なモノつて意味分からんと思うがそう思ふ。

「翻訳が間違ってるって、それはどれも教会が訳した物だよ？ そ  
もそも間違いなんてあるはず…………」

教会？　教会だあ！？

武器を持って！

# 狼煙を上げろ！

## 間違えてたら意味無い

「サヤ、間違えている部分を教えてくれ！ それと、正確な翻訳も頼めるかい？」

「無理です」

「えー…？」

「私、今から教会と交戦…………では無く、抗議に行って来ますから

「ま、待つんだサヤー！」

「イライラ、元凶、ハツ当たり上等…！」

出て行こうとする私の腕を掴んで阻止しようとするサイモンさんを引きずりながら進む。

今私の止められる者など

「そもそも君は教会の場所を知らないんじゃないかなー？」

「風漬けに探ししますから」

どれだけの街が犠牲になるかなんて関係ない。

「君は奴隸で、この街から出られないだろー?」

「う、だつた……

「ならこっそ、この街を　　」

「物騒な思考を止めて翻訳作業を手伝ってくれー!」

渋々作業に戻る私を疲れた様子で見守るサイモンさん。

そんなに警戒せんでも、もひつ諦めましたよ。

「で、何処の翻訳が間違つているんだい?」

「ああ、それは続けるんですね。

「……なんですか?」  
王國語(?)だと『聖なる光』ってなつてますよね

「ああ、これは聖文の一節だね。絵本とかにも流用されてる筈だか

ら知らない人は居ないくらいにメジャーな文章だよ

へー、でも間違えてたら意味無いよね？

「それで、正確な翻訳は？」

「『聖なる光』の部分は、『一条の光』、『降り注ぎ』では無く『舞い降りて』って、間違い多過ぎるんで、正しい文読みますから

」

『一条の光、舞い降りて、一つの月夜を照らし出す。

そして彼の者は出会つ。

奇跡の対価に生涯を差し出し、希望を対価に力を貰い受け。

魔を滅ぼす旅に出る』

つて、冷静に読んで気が付いたけど、これってアレか？

舞い降りてだから、人？

人物だとすれば『一条の光つて、一条光？』まさか日本人？

だとすれば、奇跡つていうのは一條さんが持つていた力で、希望つていうのは元の世界に変える方法かな？

まあ、この解釈も私が異世界から来た人だから出来る解釈だし、そんな訳無いない。

普通に原文が間違つてているのか、翻訳した人の凡ミス……は無いな。

まあ、気にしてもしょうがない。

考えるのはバス。

誰か頑張つて考えてくれ。

「その翻訳が本当だとすれば、今までの解釈を一新する画期的な

「

ああ、何か琴線に触れたらしいサイモンさんが唸つてる。

対岸の火事、私は知らぬ存ぜぬで通したいな。

「サヤ！ 君は何処でこの文字を覚えたんだい！？」

何か飛び火して来た！

「ワタシ ノノクニ ノ コトバ ワカリマセん」

「ふざけてる場合じやないんだよサヤー！」

ですよね。

此の地で永久に眠る（前書き）

朝早すきる気がしますが更新します  
めちゃくちゃ眠いです  
徹夜明け  
もう寝ます

此の地で永久に眠る

「君の翻訳が正しければ世界が引っこり返るんだよー…？」

まあ、なんて説明したものか。

助けて神！！  
ゴッド

【力の神　此の地で<sup>とわ</sup>永久に眠る】

この大事な時に…！

やつぱり最後に信じられるのは自分自身だけか。

「<sup>ハイ</sup>君は灰スペックなピンク色の脳ミソでクリティカルな切り返しをしようじゃないか…！」

「子供の頃から読めるんです…。」

ないわ。

言つてから後悔しましたよ。

『の言い訳は無いわ』。

「子供の頃から?」

ああ、何か怪しんでるよ。

自分でも思ひながら怪しげ爆発だよ。

「サヤ、この文字読めるかい?」

「…………?『最後』ですか?」

突然出されたメモ用紙とそれに書かれた文字を指す指。

反応したものの、意味不明。

「これは?」

「『ガラス』」

「これは」

—

!

五十個ほどの単語を無差別で翻訳して、サイモンさんは何か結論を得たようだった。

「サヤ、君に分からぬい言語つてあるのか？」

「知らないです」

「いや、今まで出した単語、全部答えられるとは僕も考えてなかつたからね」

「黙秘します」

「いやいや、褒めてるんだから

「私買い物に行つてきますね」

二  
ガ  
サ  
ナ  
イ

ひいいいい！

すつじ怖い。

めつちせひい。

眼が赤く光つてゐよこの人。

例えるならエア初機の暴モードだよ！

「話してくれるまで放さないから、ゼツタイニー！」

## パニック状態で泣く泣く説明。

ちょっと涙目になりました。

暴走モードのサイモンちゃんホント怖いです。

ちなみに説明は所々暈して説明しましたよ。

流石に異世界人だつてバレると後が面倒臭そう出し、信じてもらえるとも思つてないからね。

適当に物心付く頃には喋れるようになつてたし、話せるよつになつてたつて言っておいた。

ついでにその所為で悪い人達に悪用されたり、親に捨てられたり、最後には奴隸になつたけどゲイルさんに拾えて貰えて、信用出来る人に雇つて貰える様に便宜図つてもらうとか自分で言つててなんだけど信じてもらえなさー。

ちらりと顔色を確認。

サイモンさん、マジ泣き。

ええ～……

「そんな、そんなに辛い目に遭つたのに、よく、良く頑張ったな

」こんな泣き落としに騙されて大丈夫なんだろうか。

「ここはかとなく心配になつて、私には関係ない事かと納得しておぐ事にする。

此の地で永久に眠る（後書き）

何をやつていたのかと聞かれれば  
小説書いてましたとか言えればカッコいいんでしうけれど  
エロゲやつてました

サーセン

## 若返つた

その後、私はサイモンさんと共に翻訳修正作業を行いました。

その間に色々と知識も蓄えましたよ。

たとえば、この世界の1年が15ヶ月。

25日間が1ヶ月くらい。

月が7つ。

一月に一つずつ増えて行き、7つ揃うと今度は一つずつ減つて行く。

月が一つも出ない月が年末。

これは大発見。

私若返つた！！

次、セントリア貿易都市の位置。

王国と帝国の真ん中くらいの海辺。

海近いのか、機会があつたら行きたいもんだね。

後は魔法の免許についてつてとこりかな。

生活に使う程度であれば免許は要らなくなつてゐるらしい。

村や街単位の仕事として使うならギルドに登録するか、学校を卒業する。

国の仕事を請け負つなら学校卒業するしかない。

まあ、私は生活できる程度で十分だから学校とか面倒なモノはパス。

1ヶ月に亘る誤字、誤翻訳修正作業に遂に終わりが見えた時。

私達は当初の目的を思い出したのです。

「そう言えど、どうしてこんな事になつたんでしたつけ？」

それはもつともな疑問だつた。

私何でこんなことしてゐんだっけ？

最初は資料集めしてたよね。何で資料集めてたんだっけ？

「やつだ！　忘れてたよ」

「おいおい、サイモンさんまで忘れてたのかよ。

「君なら読めるかもしない。今から持つてくれるよー。」

「言いながら部屋を出て行くサイモンさん。

数分後、何か重そうな物を持って戻ってくる。

布で包まれているので何かは判断し辛いが結構大きい。

「これ何だけどね」

「言いながら布をはぎ取つて行く。

「仕事の報酬で無理やり押し付けられただけなんだけど、中々に興味深い

文字を見た瞬間、吸い寄せられる。

「石板の様な物に文字が彫られているんだが解読する事も、加工する事も出来ないらしい」

サイモンさんの言葉が頭に入つてこない。

私の意識に映るのは石板。

「サヤ？ ビうし」

『敗北を認めよう

明日を掴む手は空を切り

明日を目指す足は折れた』

読み上げる。

私の意思とは関係なく、口が動く。

『意志は碎かれ  
希望は潰えた』

何だこれ、ってか何か不味い気がする。

眼を開じよつとしても無理。

『我に残された最後のモノを  
勝者の貴様にくれてやうう  
受け取るがいい』

やばいやばいやばい。

これ読んじゃダメな部類のモノだよ。

『絶望だ』

最後の単語を読み上げた瞬間。

私の意識は飛んでいく。

## 魔法使いのジジイと爺爺

気が付けば真黒い空間に居た。

いや、この場合~~空~~気を失った瞬間の方が正確なのかな。

周り全部。

右も左も、下を見ても上を見ても。

過去を振り返っても未来を見据えても真黒。

真黒い空間にポツンと一人、私がいる。

どうして私だけ認識できるんだ？

光源は…………いや、これだけ真黒って事は光源なんか関係ないか。

「おお むひじゅよ しんじしまうとほ なさけない

つて、遊んでる場合でもないのか。

「ほつほ、アレを読めるとはお嬢さんも規格外だの〜

声に振り向けば、紺色のローブを着たダン・ルドアが居た。  
いや、魔法使いつぽいつてだけでダンブ・ドアは無いか。

丘髪で丘髪で、何よりも魔法使このジジイと言えば

うん、ダ・ブルドア決定。

「ワシは魔法使い、名前何ぞとつに忘れたがの」

「で、その魔法使いさんが何の用?」

「まあ、そう急くな」

それから何か語り出したよ。このジジイ。

いや、聞いてねえよ。

誰もお前の身の上話何か聞いてねえよ。

これだからジジイは。

でも、分かった事が一つ。

あの石板は個人の知識、記憶、記録、存在の全てを書き記したモノである。

書いた本人でも読めなかつたらしい。

ええ、……

私にどうしようと？

まあ、読めたのは脳内変換によるモノだらうけど。

「さて、もうそろそろ良い頃合いかの」

そして魔法使いは杖を取る。

「お主の記憶も大分ノッパーできたしの。お主の体、ワシが頑くとしよ」

「は？」

「痛くは無い、安心して逝くが良い」

いやいや、痛くないとそんなこと心配してゐる訳じゃないですか

「ちゅうと待つてー。」

若干腰が引けている気がするけど大丈夫。

隙を窺い、一瞬でけりを付ける

「何で、私の体を?」

「決まつておるわ…………」

「何で?」

「ん? 何でじゅったかな?」

「まあ、良い。覚えておった所でやる事は変わらんのだらうしの」

最低過ぎやう。

「では、今度じゃ行へ

「

「せこせこ、やうやくでこしてこね～」

「誰、やじ魔

あ、先に囁かれた。

## 気まずい沈黙

其処には黒い影。

そこには黙る。認識は出来るけど、何が黙るのか分からぬ感じ。

ハツキリ言おひへ、気持ち悪い。

「沙耶はさつわと隠のつか。」 這是君が来る所でもないからね」

「え？ 何で私の名前？」

「私の事は<sup>ほく</sup>気にしちやダメだよ」

「ワシを除者にせんでくれるかの」

「爺ちゃんむせつせと出て行くか」 で消滅するか、選ばせてあげる」

ジジイと黒い人が言い合ひを始める。

帰つてくれと言われても、私ここに来たくて来た訳でもないし。

そもそも帰り方なんて知らないんだけど……

「あの……」

「ん？ まだ居たのか沙耶、早く帰らないとダメじゃないか」

「いえ、その帰り方が分からないんですけど」

「…………」

「氣まずい沈黙。」

「はあ…………仕方ない、今回だけだよ」

黒い人が私の額に手を当てる。

「体調管理はしつかりね」

「あ、はい」

また、意識が途切れ、目を開けるとサイモンちゃんとトトアちゃんの心配そうな顔が、私を覗きこんでいた。

「あ、おはよウーリーあります」

「心配したんだぞサヤー！」

「大丈夫なの？ 怪我は無い？ 気分は？」

ベットに寝かされているらしい。

怪我は無い……筈。

気分は

そこで気が付いた。

体内の異物感。

え……気持ち悪い。

「と、トイレに、行つてきます」

数分経過。

胃の内容物も無い所為で吐く事も出来なかつたよ。  
でも気持ち悪い。

もの凄い違和感。

うへ～……

ベットに横になつてダウン中。

あの黒い人、何だつたんだろ？

私の中に居たんだし、防衛本能？

まさか私、二重人格とか裏設定無いよね……

悩んでも仕方ないか、それよりこの気持ち悪さどうにかして欲しい。

何か中に大きな塊つて言つのかな？ 何かが在るのは分かる。

ただ、それが私には気に食わない、気持ち悪い。

その塊が馴染んで来てるのが分かるつてのも嫌な話だよ。

たぶん、半日もすれば違和感なんて分からなくなるんじやないかな。

ラミアさんに作つてもらつたお粥を無理やり腹に收めつつ、あの石板は絶対に私が壊すと決意していた私は気が付かなかつた。

その異物の正体。

人生でベスト3に入る要らないモノを手に入れたのは、この瞬間  
だつたと思う。

## 気まぐい沈黙（後書き）

活動報告にも書きましたが  
今週、来週は作者の仕事の関係で  
二日に一回の更新が限界です  
今もストックも無くて自転車更新状態です  
下手すると3日に一回の更新になるかもしませんが  
気長に待ってやってください

## 9割は無駄になる

人の努力つて、9割は無駄になるモノだよ。

うん。

いきなり何言つてんだって思つでしょ。

私だつて言いたくないよ。

実は日課になりつつある朝の魔法の練習してました。

いや、しようとした。

そしたらなんだ、ええつと……

バケツ一杯の水を出そうとした。（今の全力だと思つてた量）

空から滝が降ってきた。

い、今起じつた事をありのままに話すぜ。

それは空から突然現れたんだ。

いつも通り水をそうとしただけなんだ。

そしたら滝が現れた。

まさにバケツ それも特大の を引つ繰り返したような  
水が現れた。

きつと調子が良かつただけだ、何かの間違いだと思いながら焚火を作ろうと思つたんだ。

ちょっと濡れちゃつたし、薪を集めて火を付け様としたんだ。

キャンプファイヤーが現れた。

もう何が何やら……

そして気が付いた。

と言つよりも、一つの仮説を立てた。

あの感じていた違和感。

お腹の中には大きな塊。

たぶん魔力だ。

丁度下腹部の当りに在るし、何よりあいつ魔術師とか名乗つてたし。

まさかとは思うけど、もしかしたら、あの魔術師取り込んでしゃつた？

うわあ。

何か私の知らない知識とかも一杯頭の中に在るし、魔法についての知識とか知らないはずの魔法陣の知識も考える必要もなく答えが出てくる。

まだ人間辞めたくないな……

手に入れた知識はもともと持っていた知識から考えると数世代前のモノなんだけど、それでも、その当時（今は知らないけど）では最高のモノだと思う。

サイモンさんの『世界のアカシックレコードゴミ場庫』<sup>アカシックレコード</sup>に在るモノは結構古いモノから新しいモノまであるけど、ここまでのモノは無かったと思う。

手に入れたモノの中で一番使えそなのは魔術回路の基礎つぽいモノ。

今では（？）魔力を通し易い物質で作って、武器や防具に埋め込

んでもるよ'うな感じだと思つんだけば。

魔力で道を作つて、そこに魔力を通す。

これなら武術と組み合わせれば結構面白い事が出来る気がする。

演武ならぬ炎武とか、ちょっと憧れるな。

魔法陣については使えなかつた。

いや、私には使えなかつたが正確か……

美術評価1の私に正確な図形を期待してももつても困る。

書いつとしたら になつちやう。

なら逆に 書けばいいんじゅね？ って思つて 書いたら にな  
るし。

書いつとしたら 以外にならないんだよ。

私に書けるのは二角だけか……

ごめんね。 美術評価1で、ごめんね。

まあ、書けないモノは仕方ない。

すっぽり諦めて魔法回路の方を武術と組み合わせるの頑張る。

幸い、魔法回路の方は正確じやなくててもいいっぽい。

適当に書いてもそれなりに発動するし、逆に、これでもかつてから適当にやると魔力がそのまま衝撃波っぽく放出される。

ハド ケン。

習得しました。

まあ、牽制くらにはなると信じたい。

結局3か月を費やした翻訳作業は、私の能力によつてほぼ全て無駄に終わり。

私が4ヶ月ほどを費やした魔法の特訓は、なんやかんやで全て無駄になってしまった。

うん、人の努力つて、9割は無駄になるもんだよ。

9 郵便は無駄になる（後書き）

毎日5時起き

そして

家に帰つて来れるのが6時過ぎ  
ゆっくり寝たいです

先週と今週は土日も仕事で

ほんと、ゆっくり寝たいです

それは唐突だった。

「サヤ、次の週末から出かけるんだけど、付いて来てくれないか?」

「ハミアさん、サイモンさんが浮氣しちゃうとしてますよ」

現在朝食中。

サイモンさんの横数センチの空間をナイフが飛んでいく。

常人でのスピード大したものだと思ひ。

「ハ、ハミア…………？」

「サイモン、娘に手を出したら

「…………出したら?」

「斬り落としますよ?」

「出れない! 絶対に出れないから!」

そこまで否定されると女としてのプライドって奴が傷つくのは何故だろつか。

まあ、複雑な心境だよ。

「大体、仕事だよ、仕事。遺跡の調査と解読を頼まれてね」

「まあまあ、また仕事ですって、今度は忘れない内に帰つて来て貰いたいものね~」

「忘れたら、骨だけ捨ててあげます」

「ハハアさんの言葉が凄くトゲトゲしい気がするナビ、やつと氣のせいだ。」

それにサラよ、せめて拾つてあげてくれ…………ああ、拾つた後じやないと捨てられないか。

サイモンさんが明確なダメージ受けて机に突つ伏してゐる。

「で、今回は何処まで行くんですか?」

「ああ、ここから馬車で1週間ほど行つた所なんだが、新しい遺跡が発見されてね。その調査だよ」

どうも見た事のない文字も発見されてるらしいからその解読も、と付け足すサイモンさん。

「面倒な……」

「それの解説を私に任せると……」

「いやいや、道中と調査中の護衛を頼もうと思つてね」

更に面倒臭そう。

全力で辞退したいけど、奴隸だし拒否はできないよね。

「今回の遺跡は勇者と魔王の時代のモノじゃないかって噂もあってね。どうだい、わくわくしないか？」

「いえ、全く、これっぽっちも」

嫌な予感が……

「まあまあ、そつ言わずに、行つてみれば結構楽しいもんだよ」

「父さん、サヤに無理させないでくださいね」

「サヤ、危なくなつたらサイモンの事は引かずつてでもいいから帰

つてくるのよ」

朝食が終わり次第ととりあえず準備を始める。

まあ、持つて行く物なんてほとんどないし、準備するのは各種武装系なんだけど。

この世界だと一つの剣もクズ鉄からオーダーメイドまで。

作るのにも探すのにも時間がかかる。

ナイフ中心に買い集めとけば問題ないと思つし、最近手に入れちゃつた魔法も少し改良しどかないと。

この時点に戻れるのなら、私は殴つてでも旅への同行を止めていたと思つ。

いや、絶対に止めてみせる。

この後に待ち受けの面倒事を考えれば、それだけで鬱になりかねないモノばかりだからね。

やつと通常更新に戻れそうですが  
頑張つて一日一話  
もつと頑張つて一日一話  
地道に頑張つて行きますよ

## 貞操の危機

旅の準備は万全。

旅までの間にいろんなものを仕入れた。

刃渡りの長い近接用ナイフ、動物を捌く用のナイフ、それと投げナイフ、食料品は全部サイモンさんに一任しているから、その他ナイフを取りそろえて合計50本準備した。

あれ？ ナイフしか買って無い……だと！？

まあ、別に気にしないんだけどね。

旅支度の時には服にナイフを30本程装備できる様に魔改造を施した。

ホントに魔法って便利だ。

ちょっと魔術回路を捻じ込んでやればナイフを収納するスペースがこれでもかってくらいに増えやがりましたよ。

ついでに両手両足にも魔力を開放する為の簡易魔法回路を組み込んでみた。

効果は魔力の放出 これだけでも衝撃波として使用出来るから対人戦には有効 と展開した魔法の効力の維持。

まあ、魔法回路で作りだした魔法は回路から離れることに効力が無くなつて行くからそれ対策にやつてみたんだけど、衝撃波はオマケについて来た。

そして旅に出た私達。

『達』って言つても私とサイモンさんの一人だけ。

「もしかして貞操の危機！？」

「何をいきなり言い出すんだこの娘は！」

「いやだつて、一人旅ですよ？ しかも『主人様ですよ？』

「その旅が今、まさに、死での旅になりそうなんだけど！」

現在、盗賊に囮まれてます。

総勢20名に満たない程度の人数。

街を出て一日、野営の準備をしているところを狙われました。はい。

「小娘え、此処で会つたが百年目だ」

はて、何処かで会つた事の在る様な野郎だな。

四肢を怪我しているのか、リーダーっぽい大柄な男は不自由そうに武器を構えている。

「お前はただ殺すだけじゃ飽きたらねえ。凌辱して四肢を斬り落として、『人間の肩になつても生殺しの状態で生かし続けてやる……』

なんか凄い恨まれてますが……

「あの～」

「あああ！？」

「付かぬ事をお聞きしますが、何処かでお会いしましたつけ？」

「ふざけてんのか、ああ！？」

やばい、何でこんなにキレた人と知り合いになつちゃつたんだろう。

「サヤ、本当に覚えてないのか？　この街に来る時に襲つてきた盗賊だと思つんだが」

「ああ！　そう言えば会いましたね、人間の肩と」

サイモンさんの一言で思い出した。

そう言えばそんな事もあつたな、良い思い出として心の奥底に眠つてくれればいいモノを、憐れな……

「『主人様、殺していいですか？』

「『主人様って呼ぶのやめてくれないかな？ どうせならパパとか父さんとか、せめてサイモンさんって呼んでくれないか？ それと殺しはダメだよ』

「では旦那様、此処に居る全員を殺していいですか？」

「むしろ不安材料が増えた！？」

殺さずについては強者の傲慢だと思つ。

大体、私はこの人数相手に殺さずを貫けるほど強くは無い。

「てめえらは俺をおちよくなんのか！」

リーダーっぽい大柄の男が怒鳴り声と共に持つていた武器を投げつけてくる。

それを手で弾く。

魔法回路の調子はいいらしい。

バチン、と音の音と共に投げつけられた剣はあらぬ方向へと飛んでいく。

うん、殺そう。

空中に魔法回路を描き出す。

私の魔力の量を考えると呪文だけの帝国魔法の方が手っ取り早いんだけど、呪文詠唱って恥ずかしいんだよね。

その点、魔法回路を使用すれば一言呴くだけで魔法が発動できる。

こんな風に

「炎」

呴いた瞬間、正面の盗賊達に炎が迫る。

服を焼き、肉を焼き、骨すら残らず、塵と化す。

その光景を見る者は、一人以外、総じて恐怖に引きつる顔をしている。

その光景を作りだした私は、何の感情も映し出す事も無く、無表情にそれを見つめる。

まったく、  
面倒な

貞操の危機（後書き）

風邪引きました

体調崩して一日寝込んだ作者を許して神様！

無難に外堀から

「～～～」

料理、料理します。

野営で最も重要なのは火だと言える。

調理や野生動物への牽制なんかの効果、一番の理由として安心感。

人つて言つのは暗闇を恐れる生物もある。

光、光源が在ればそれだけで結構安心するモノだ。

玄人にしてみれば火なんかは逆に危ないと感じる事もあるが、そこまで熟練した技やら精神やらをサイモンさんに求めるのは酷なモノが在る。

私は今、結構不機嫌もある。

折角見逃してやつた人外虫がまた視界に映つた事とか、アレからサイモンさんが微妙に不機嫌だとか、結構いろいろストレスが溜まつちゃつて仕方ない。

大体、盗賊が普通に草むらから現れる世界で人殺しに對して嫌悪

感を感じるべからずには温厚育ちなサイモンさん。

良く旅をしているらしい学者のサイモンさんでも「れなのだ、一般人からしたら私は異質、むしろ異常なのだろう。」

「あれだけ殺した後なのに随分と」機嫌なんだね

不機嫌なサイモンさんの声。

「いえ、今の私は不機嫌ですが、何か？」

「鼻歌歌いながら料理して、右手でテンポまで取つてゐるのに不機嫌？」

ああ、確かに態度だけ見れば「機嫌なように見えるかもしねい。

でも、これは魔法を使つてゐるだけであつて、間違つても「機嫌な状態では無いのだ。

「魔法を使つてゐるだけですよ。別に機嫌が良い訳では会いません

「魔法？」

「うう、そりそり良れやうですね。食べながら説明しましょうか？」

「…………まあ、よろしく頼む」

不機嫌ではあるが、学者としての知的好奇心には勝てなかつたら  
しい。

何処から説明したものか。

「サイモンさんは魔法って何だと思います?」

無難に外堀からいって。

「一般的には魔法は奇跡だと言われているね」

神が人に与えた一つの奇跡、天から零れ落ちた一つの法則。

解釈はいろいろあつた氣がする。

「学者である僕の考えとしては自然法則の一つだと考えて入るんだ  
けどね。その法則性を解き明かすのは僕には不可能だと痛感してい  
るから考えないようにしてる」

一般人、それも学者でこの程度の理解なら魔法について解説され  
るのはまだまだ先の事だろう。  
サイモンさんは

「私の知識、魔術師の石板から得たモノですが、魔力って言つのは生命力の事でもあります」

魔力＝生命力。

物質であれば、生命力を持つていないモノはない。

無くなれば死ぬ、壊れる。

水でも植物でも動物でも、生命力が無ければ存在しない。

その生命力操るのが 魔法

「生命力操るのが魔法、では帝国魔法と王国魔法、一番の違いはなんだと思います？」

「威力……は結果として表れる物だから、使用言語とか魔法陣を使用するかしないかってところかな？」

「強ち間違つてはいませんが、一番の違いつて言つのは魔力を求める先です」

「求める先？」

「帝国魔法は魔力を自分の中に求めます。それとは反対に、王国魔法は自分之外に求めるんですよ。その為の集束機や変換機が魔法陣

や魔法回路つて訳です

魔法陣は特定の魔力、つまり水系統の魔法を使いたいのであれば水の生命力を、土系統なら土の生命力をつて具合に集める為のモノ。

魔法回路は集めた魔力の変換機、土系統の魔力を無理やり水に変えたり、威力の調整をしたりつてのが大きな効果だ。

「帝国魔法と王国魔法、共通しているのは呪文が必要つて所なんですが、何故だと思いますか？」

「それは……あれ？」

「魔法に必要なのは魔力とイメージ、そして『音』です」

「音？」

「音で魔力を変換する事も出来ますし、発動の為の鍵、一種のストップバーの様な物の役割もしてますね」

帝国魔術は自分の中の魔力、ほぼ純粹で無色な生命力を変換する為に呪文を使っている。

その所為で長い呪文になりがちなのだが、そこは膨大な魔力で短い詠唱を可能にしていると言つたところか。

塵も積もればなんとやら。

10から1の魔法しか生み出せなくとも、元が1000なら100になる。

「これで最初に戻れますね」

ああ、やっと基礎が終わったよ。

もう寝いいですか？ ダメですか。

おかしいな

この辺りは一話で終わらせる筈だったのに^ ^ ;  
次で魔法の説明は終わります

「私がやつてたのは簡単な魔法回路の製造と、発動呪文の簡易詠唱です」

「それは……」

うん、まあ、人外級の技術だとは自分でも思うんだけどね。

ほら、火力が調節できるつて便利なんだよ。

「でもこれ、数世代くらい前の技術を発展させただけなんですよ」

「…………は？」

驚くなつてのは無理な話だらつけど、実際にはそんな感じ。

「魔法回路だつて昔は毎回手書きしていましたけど、今じゃ魔力の通りが良い物質で作つて武器の中に組み込んだりしています」

「ああ、そう言えばそつか」

「簡易詠唱だつて、音が発動の鍵になつているつて知つていれば、それと同じような音を出せば魔法は発動するつて事ですよ」

だから個人個人で詠唱は違つたりするんだろう。

他人の詠唱で自分の魔法が暴発するなんて怖すぎる。

「魔法は言つてしまえば事象の変換技術です。つまり、出来るだけ事象を変換しないように魔法を発動した方が魔力の消費が少ないうち事なんです」

「いや、ちょっと待つてくれ、訳が分からなくなってきた」

「今の料理で例えますと、火を作りだすにはそれなりの魔力が必要です」

「まあ、確かにそうだね」

「でも、火を操る魔法なら魔力の消費つて凄く少ないんですよ」

「…………？ ああ、つまりは元々在る物を利用した方が効率良いって事かい？」

「ええ、概ね間違つていませんよ。それに、火を作り出しながら火加減を操りつつ料理するなんて高度な事、私には出来ませんよ」

「アレだけの魔法を使っておいて器用じやないって？」

「藪蛇だつたらしい。」

「いや、僕にも分つてはいるんだ。殺さずにこつて言つのはそれだけの力量と技術が必要だつて言つのは

」

でもとサイモンさんは言葉を続けて行く

「娘が人を殺すつて事に納得がいかないだけだね。これでも旅先で殺し殺されくらいなら幾らでも見て来たんだけどね

一般人ならそんなもんです。

本当に娘の様に思つてくれているのには感謝してもし足りないけれど、私の性格は直そうと思つても治るもんじやないし。

ここは諦めてもうう他無いね。

その後の旅は順調そのものだった。

何事も無く遺跡に到着。

先に来ていた先遣隊の皆さんに挨拶しつつ、地下遺跡の概要を聞く。

どうも地下数百メートルに渡つて巨大な遺跡が存在しているらしい。

初代勇者の墓と思しき物も発見されているらしい、これから調査次第ではこの辺りに街が一つ出来るかもしないとのこと。

観光名所って奴だね。

なんて言つたか、この世界の人は商魂逞しい。

まあ、そんなどうでもいい事は置いておいて、たぶん、此処が分岐点だったんだと思う。

いや、分かれ道にすらなつて無かつた。

選択肢の無い分岐点。

運命、宿命、言葉ではなんとでも言えるけど、後悔するのはきっと、物語が終わってからだね。

## 商魂逞しい（後書き）

もう少しある2章も終りです  
2章は自転車更新で短い話が多かつた気がします  
なので、2章の話数を少し短くするために  
くつ付けたり書き直したり……  
まあ、そんな予定もあるんで、3章前にひょいと時間くばさない

## 逆恨みつて怖いよね

調査開始一田田。

地下の遺跡は広大だった。

地上に在る入口から降りて数十メートル。

眼前に広がる遺跡。

見た感じでは地下都市って言つても差し支えない。

これが勇者の為だけの墓だつて言つても誰も信じないと思つんだ  
けど、作った人の気分は古墳つて感じなのかも。

中心部には大きな石碑、其処を巡る様に道が在つて街並みが出来  
ている。

「これは、凄いな……」

サイモンさんが思わずと言つた感じで言葉を漏らす。

「そうでしょう、私達も最初に見つけた時は自分の眼や頭を疑いま  
したよ」

先遣隊の人人がサイモンさんに軽い感じで返す。

確かにこんなのが見つけたら、先ず自分の頭とか疑っちゃうよ。

「眺める事はまたできます。行きましょう」

「田描すのは中心部ですか？」

一步踏み出したサイモンさんに質問する。

「いえ、今日は外周の街を調査します。何も無い可能性もありますが、此処まで大きな遺跡です。何も無い方がおかしいでしょ」

サイモンさんの言葉通り、遺跡の調査は外周から始まり、一日目の調査はそれで終わる。

特に何の発見も無いまま、一田田、二田田と過ぎて行くんだけど、外周から中心部に向かって行くにつれて遺跡の破損が激しくなつて行く。

破損状態は何か大きな物でぶつ壊した様な物から、何かで壊そうとして出来なかつた傷などなど。

時には人の骨らしきものも見当る様になり、嫌な予感がビシビシ伝わってくるね。

「サイモンさん、これ以上中心部に近付くのはやめませんか？」

遺跡調査5日目。

流石にこの遺跡は不味いと感じた私は、サイモンさんに進む。いやだって、私はまだ死にたくないよ。

「こちなつじうしたんだい？」一歩まで順調に進んできたんだ。明日には中心部だよ」

やがて、中心部までの往復は地上からだと半日はかかるため、調査の事を考えて遺跡内で一泊し、調査を行う事にしたのである。

「いやいや、明らかに不味いですよ」

とりあえずこの周囲の状況とか説明。

「これで諦めてくれれば

「さつせつせ、サヤは怖がりだなあ」

「ハイシ…………へへ#

「何があつてもサヤが守ってくれるだろ? なり句の問題も無いじやないか」

「私にだつて出来る事と出来ない事の区別は在りますから、何があつた場合逃げますよ?」

「その時は僕も連れてつてくれると助かるな

明日は早い、今日もつゝみつ。

毛布に包まり、周囲に意識を飛ばしながら仮眠をとる。

奴隸つて事と若い女性であるつて事が災いして、調査中に何回か襲われかけるんだよ。

全員撃退したナビ、逆張みつて怖いよね。

ちょっと大事なところを蹴り上げて、鳩尾に一撃加えて投げ飛ばしただけなのに、「覚えてるこの雌豚!」とか捨て台詞吐かれるなんて。

この世界は怖い所だよ。

お待たせして申し訳ない

今回ちよつと長めです

遺跡中心部。

円形の広場の様な感じで、出入り口は一つ。

私達が入ってきた場所と、その反対側に一つだけ。

中心には遺跡の入り口からも見えた大きな長方形の石碑が置いてある。

何やら文字が書いてあるっぽいんだけど、脳みそが危険信号を出したので詳しく確認はしない事にした。

だつて、また魔法使いみたいなのが出てきたら嫌じゃない。

私の感は意外と当る。

もちろん、悪い意味で……

よし、気を取り直して散策だ。

どうせ私がやる事なんてほとんどないんだけどね。

分からぬ文字が出ればそれを解読。

分からぬ魔法が出ればそれの解析。

「サヤー、「J」の中心に在る文字なんだけど……」

「分かりません!」

「まだ見ても居ないのに……」

知らない、私には分からぬ。

サイモンさんの頼みでも読みたくないし見たくない。

職務放棄?

私には何の事だか分からぬ。

「私には意味が分かりません」

「せめて見てから判断してくれないか?」

しつこいな。

世の中頼まれただけで仕事してたら報酬の意味が無いんだよ。

「J」の文字なんだけど、どうも魔法使いの石板と似たような感じなんだけど

『汝の存在意義は何だ？』

「僕の存在すら否定するのかい！？」

え？ 私何も言ってな

『汝は誇りとは何だ？』

「僕は妻と娘にかけて自分が学者である事を誇りに思つてゐるよ。」

待て！

凄い嫌な予感が

『汝の覚悟、見せて貰おうぜ！』

「え？」

それは誰の咳だつただろう。

たぶん、思わず私の口から零れた咳だと思つ。

当りが光りに包まれ、その光が收まるとき跡の中心部、あの巨大な石板の前にイケメンが居た。

金髪でサワヤカ系。

青を基調とした鎧を前身に纏っているその姿は、まるで戦士の名が相応しいんじゃないだろうか。

でも私は全力で遠慮したい。

だつて……絶対に碌な事にならないよね。

『 いじは何処だ?』

あれ? 意外とまともなんじゃない?

これは話せば分かつてくれる気がするよ。

最低でも魔法使いみたいに問答無用でみたいな展開は無くなつたつぽい。

『 ん? 其処に見えるのは異界の者か?』

「 いえ違います」

思わず口から飛び出た。

でもこれ肯定してると変らなって気が付いたのは言つた後。

他の人たちがあまりの展開に茫然としているので気が付かなかつたみたいだけだ。

『ほほう、何時振りかは分からぬが異界の者に逢えるとは、これが天命と言ひモノか』

「サイモンさん、二つちく」

サイモンさんが思考停止している。

前言を撤回しよう。

この状況、絶対に逃げないとやばい。

『異界の者相手に勇者では物足りぬかもしけぬが許せ』

勇者相手とか荷が勝ち過ぎますから。

私は一介の奴隸ですよ？

実力の差が分かるくらいってか、格が違うのが分かる。

戦つたら絶対に負ける自信が在る。

勇者は構えても居ないのに隙がない、勝てる要素が何処にも無い！

『準備は良いか?』

何とか出来る方法を脳内検索しながらサイモンさんの元へ走る。

この状況でサイモンさんと離れ離れになつたら奴隸の刻印の所為で行動不能。

最悪の場合は死ぬ。

『ほつ、この状況で主を守るとは何処ぞの騎士を思い出すな?  
騎士とは誰の事であつたか思い出せぬのだが、瑣末な事か』

サイモンさんの元へ辿り着くと同時に脳内検索終了。

脳内検索の結果。

ヒットしたのは魔法使いが残した最強の魔法。

その他の方で勇者を倒す事は不可能に近い。

呪文が長いのがネックになるが、その他必要なのは状況設定だけ、呪文は忘れもしない魔法使いの石板に記されていたアレだ。

効果は自分が受けたダメージを2倍にして指定した相手に与える事。

死ぬギリギリまで傷を負えば勇者を倒すには十分なダメージになるはずだ。

まあ、それまで生きて居ればだけど……

どうせ、これ以外に選択肢なんてありませんから！

あれ、注意文？

## 使用条件

敗北を認めた時にのみ使用可能です  
全魔力いのちを使用する為、使用者は死亡する可能性が高いです  
用法用量は正しく扱いましょう

1  
?

思わず声が飛び出た。

この魔法が在る限り敗北を認めるのは難しい。

この魔法を使えば勝てるって無意識に思つてしまふから。

しかも使つたら死亡？ 何それイジメ！？

「逃げますよ！」

サイモンさんの手を取つて走り出す。

この時、私の命を掛けた鬼ごっこが始まった。

勝利条件は

勇者から逃げ切る事。

ハンデはサイモンさんを底いながらつて所が無理ゲーだよね。

金髪でサワヤカ系（後書き）

やつとりセリウムストまでの構想が出来ました

ほんまに更新して行きますんで、しばしの御付き合いで

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7822w/>

---

奴隸少女は規格外

2011年11月27日10時52分発行